

平成 2 2 年度

外部評価報告書

平成 2 3 年 9 月

鹿児島工業高等専門学校

はじめに

鹿児島工業高等専門学校は、平成 23 年 2 月 24 日に外部評価委員会を開催しました。本報告書は、その審議と意見交換の概要、学校としての今後の対応策等をまとめたものです。

この外部評価委員会に先立って、本校では 3 年に一回の自己点検評価を実施し、その報告書を平成 23 年 3 月に刊行しています。この自己点検評価の報告書は、本校が平成 24 年度に大学評価・学位授与機構による機関別認証評価を受審することから、基本的には認証評価のフォーマットにしたがってまとめました。外部評価の目的のひとつは、本校が実施した自己点検評価に対して、外部評価委員の方々からのご批判、ご意見をいただくことです。そのため、外部評価委員の方々には、自己点検評価の報告書（案）を事前に読んでいただいたうえで、外部評価委員会にご出席いただきました。できるだけ近々の本校の実態に基づいてご意見やご提案をいただくために、自己点検評価を行ったのと同じ年度内に外部評価委員会を開催することにしています。

外部評価委員会では、委員の互選により、鹿児島大学の門教授（鹿児島大学教育センター長）に委員長に就任していただきました。本校から、自己点検評価報告書の概要、本校の概要（教育目標、入学試験、カリキュラム、卒業後の進路、専攻科概要、学校行事、広報活動等）、学生支援（就学支援、学生相談、課外活動等）、学生寮（入寮者、寮生会、チュートリアル制度等）、産学官連携、研究活動等について説明しました。説明終了後、委員による学内視察をはさんで委員会を再開し、全ての外部評価委員の方々から順次コメントや質問をいただいて校長が逐次回答し、担当者が補足しました。

外部評価委員会は半日のスケジュールで実施しましたが、外部評価委員の皆様には会議終了後 2 週間程度までに門委員長にレポートを提出していただき、門委員長に各委員の指摘事項等を項目別に整理していただきました。ご指摘いただいた事項等に本校が回答や今後の対応等をまとめ、この報告書の巻末に一覧表として掲示しています。次回の外部評価委員会は 3 年後の平成 25 年度に実施する予定であり、平成 25 年度の自己点検評価には、一覧表に盛り込まれた指摘事項への本校の対応策やアクションプランが、3 年間でどの程度達成できたかも加える予定です。

平成 25 年度は、独立行政法人国立高等専門学校機構（高専機構）の第 2 期中期目標・中期計画の終了年度であり、第 3 期の計画を策定する年度でもあります。この外部評価の結果は、平成 24 年度受審予定の認証評価、平成 26 年度からの本校の第 3 期中期計画にもつながるものです。本報告書に、忌憚のないご意見やご批判を賜りますようお願い申し上げます。

平成 23 年 9 月
鹿児島工業高等専門学校長 赤坂 裕

目 次

はじめに

1. 外部評価委員会委員名簿	1
2. 外部評価委員会出席者名簿	2
3. 鹿児島工業高等専門学校外部評価実施要領（平成22年度）	3
4. 平成22年度 自己点検・評価報告書 第6号 （平成19年度～平成21年度）目次（抜粋）	4
5. 平成22年度外部評価委員会日程表	5
6. 外部評価委員会規則	6
7. 外部評価委員会議事録	7
8. 外部評価委員からの提言に対する回答及び今後の対応等	45

【参考資料】

平成22年度 自己点検・評価報告書概要（抜粋）	50
基準1の自己評価の概要	50
基準2の自己評価の概要	50
基準3の自己評価の概要	51
基準4の自己評価の概要	51
基準5の自己評価の概要	52
基準6の自己評価の概要	53
基準7の自己評価の概要	54
基準9の自己評価の概要	55

1. 外部評価委員会委員名簿

役 職 名	氏 名
第1号委員 国立大学法人鹿児島大学大学院理工学研究科機械工学専攻 教授 国立大学法人鹿児島大学教育センター長	門 久 義
第2号委員 霧島市教育委員会 教育長	高 田 肥 文
第3号委員 財団法人かごしま産業支援センター 専務理事	時 田 光 一
第4号委員 株式会社トヨタ車体研究所 取締役社長 錦江湾テクノパーククラブ 会長	宮 村 憲 一
第5号委員 株式会社南日本新聞社 霧島総局長	濱 田 俊 二 郎
第6号委員 消費生活アドバイザー 鹿児島大学経営協議会学外有識者	石 窪 奈 穂 美
第6号委員 株式会社相良製作所 代表取締役社長 鹿児島工業高等専門学校同窓会長機械工学科1期生	相 良 正 典

2. 外部評価委員会出席者名簿

外部評価委員会委員出席者

役 職 名	氏 名
国立大学法人鹿児島大学大学院理工学研究科機械工学専攻 教授 国立大学法人鹿児島大学教育センター長	門 久 義
霧島市教育委員会 教育長	高 田 肥 文
財団法人かごしま産業支援センター 専務理事	時 田 光 一
株式会社トヨタ車体研究所 取締役社長 錦江湾テクノパーククラブ 会長	宮 村 憲 一
株式会社南日本新聞社 霧島総局長	濱 田 俊二郎
消費生活アドバイザー 鹿児島大学経営協議会学外有識者	石 窪 奈穂美
株式会社相良製作所 代表取締役社長 鹿児島工業高等専門学校同窓会長機械工学科 1 期生	相 良 正 典

鹿児島工業高等専門学校出席者

役 職 名	氏 名
校 長	赤坂 裕
教務主事	教務委員会委員長 植村 眞一郎
学生主事	学生委員会委員長 岡林 巧
寮務主事	寮務委員会委員長 南金山 裕弘
専攻科長	専攻科委員会委員長 原田 治行
地域共同テクノセンター長	地域共同テクノセンター運営委 員会委員長 研究・知財委員会委員長 芝 浩二郎
校長特別補佐（総務・企画担当）	自己点検・評価委員会委員長 西留 清
校長特別補佐（国際交流・留学生担当）	国際交流委員会委員長 精松 伸二
図書館長	図書館運営委員会委員長 保坂 直之
情報教育システムセンター長	情報教育システム委員会委員長 堂込 一秀
学生何でも相談室長	松田 信彦
広報委員長	広報委員会委員長 大竹 孝明
F D委員長	F D委員会委員長 室屋 光宏
一般教育科文系科長	鮫島 俊秀
一般教育科理系科長	白坂 繁
機械工学科長	池田 英幸
電気電子工学科長	須田 隆夫
電子制御工学科長	宮田 千加良
情報工学科長	榎園 茂
都市環境デザイン工学科長	前野 祐二
事務部長	大園 利則
総務課長	栗田 耕
学生課長	浦川 宗久
技術長	山下 俊一

3. 鹿児島工業高等専門学校外部評価実施要領（平成 22 年度）

1. 趣旨

鹿児島工業高等専門学校の点検及び評価について、外部の有識者により本校の教育活動に評価、助言を受ける。

2. 評価方法

外部評価は、※¹鹿児島工業高等専門学校の自己評価書概要、※²自己点検・評価書等に基づき、教育活動（基準 8（施設・設備）・10（財務）・11（管理運営）を除く）について行う。

委員会終了後、各委員に外部評価結果について、報告書の提出を依頼する。

※¹ 鹿児島工業高等専門学校の自己評価書概要（基準 1～7、9）は、50 ページに抜粋。

※² 自己点検・評価報告書の目次を次ページに抜粋。

（完全版は本校 HP に掲載。<http://www.kagoshima-ct.ac.jp/dis/>）

3. 外部評価委員

- (1) 門 久義 国立大学法人鹿児島大学大学院理工学研究科機械工学専攻 教授
国立大学法人鹿児島大学教育センター長
- (2) 高田 肥文 鹿児島県霧島市教育委員会教育長
- (3) 時田 光一 財団法人かごしま産業支援センター 専務理事
- (4) 宮村 憲一 株式会社トヨタ車体研究所 取締役社長
錦江湾テクノパーククラブ会長
- (5) 濱田 俊二郎 株式会社南日本新聞社 霧島総局長
- (6) 石窪 奈穂美 消費生活アドバイザー
鹿児島大学経営協議会学外有識者
- (7) 相良 正典 株式会社相良製作所 代表取締役社長
鹿児島高専同窓会長機械工学科 1 期生

4. 外部評価日時

平成 23 年 2 月 24 日（木） 13:30～17:30

鹿児島工業高等専門学校 管理棟 2 階大会議室

5. 事前配付資料

- (1) 本校の特色
- (2) 自己点検・評価報告書の概要
- (3) 自己点検・評価報告書
- (4) 平成 19 年度の外部評価委員からの提言に対する本校の対応
- (5) 平成 22 年度 学校要覧

6. 当日配付資料（外部評価委員）

- (1) 平成 22 年度 鹿児島工業高等専門学校 外部評価委員会の日程
- (2) 外部評価委員会 学校概要説明資料
- (3) 外部評価報告書
- (4) 鹿児島高専関連記事（平成 15 年 4 月～平成 23 年 1 月）
- (5) 文部科学教育通信 248 号抜粋（赤坂校長インタビュー記事）

4. 平成22年度 自己点検・評価報告書 第6号 (平成19年度～平成21年度)

目 次 (抜粋)

I. 現況及び特徴	1
II. 目的	2
III. 基準ごとの自己評価	
基準1 高等専門学校の目的	4
基準2 教育組織(実施体制)	13
基準3 教員及び教育支援者	32
基準4 学生の受入	56
基準5 教育内容及び方法	71
基準6 教育の成果	197
基準7 学生支援等	233
基準8 施設・設備	264
基準9 教育の質の向上及び改善のためのシステム	268
基準10 財務	289
基準11 管理運営	328
IV. 追加評価事項A (研究活動の状況)	348
V. 追加評価事項B (正規課程の学生以外に対する教育サービスの状況)	373

5. 平成22年度外部評価委員会日程表

1. 日 時 平成23年2月24日(木)
13:30～17:30
2. 場 所 鹿児島工業高等専門学校 管理棟2階 大会議室
3. 会次第
 - (1) 開 会
 - (2) 校長挨拶
 - (3) 委員及び本校出席者の紹介
 - (4) 委員長選出
 - (5) 学校概要説明
教務主事
 - (6) 施設見学
 - (7) 意見交換及び質疑応答
 - (8) 外部評価委員打合
 - (9) 閉 会

6. 外部評価委員会規則

(設置)

第1条 鹿児島工業高等専門学校（以下「本校」という。）に外部評価委員会（以下「委員会」という。）を置く。

(目的)

第2条 委員会は、本校が行った自己点検・評価結果等について検証を行い、本校の教育・研究等の改善に資することを目的とする。

(組織)

第3条 委員会は、人格識見が高く、かつ、本校の発展に理解ある次の各号に掲げる学外者の中から、校長が委嘱した若干名の委員をもって組織する。

- (1) 大学、高等専門学校等の高等教育機関の教員及び経験者等
- (2) 本校の所在する地域の教育関係者
- (3) 地方自治体等研究機関の研究者等
- (4) 産業界の有識者
- (5) 報道機関の有識者
- (6) その他校長が必要と認める者

(委員の委嘱)

第4条 委員の委嘱は、外部評価委員会の開催に合わせて、必要な期間行うものとする。

(委員長)

第5条 委員会に委員長を置き、委員の互選により選出する。

2 委員長は委員会を召集し、その議長となる。

(報告書と公開)

第6条 外部評価を行ったときは、報告書を作成し、公開するものとする。

(運営)

第7条 委員会の運営については自己点検・評価委員会が行う。

附 則

- 1 この規則は、平成16年5月21日から施行する。
- 2 この規則施行後、最初に第3条に規定する委員となる者の任期は、第5条の規定にかかわらず、平成18年3月31日までとする。
- 3 鹿児島工業高等専門学校と有識者との懇談会要項は、廃止する。

附 則

この規則は、平成22年4月1日から施行する。

7. 外部評価委員会議事録

開 会

【栗田総務課長】 定刻となりましたので、ただいまから、平成 22 年度鹿児島工業高等専門学校外部評価委員会を開催いたします。私は委員長選出までの間、司会進行を務めさせていただきます総務課長の栗田でございます。よろしくお願いいたします。

開会 校長あいさつ

【栗田総務課長】 それでは、開会にあたりまして赤坂校長がご挨拶申し上げます。

【赤坂校長】 委員の皆様方、本日はお忙しいところ本校まで足を運んでいただきありがとうございます。

組織の向上のためには点検・評価は欠かせないことであります。本校におきましても 3 年に 1 回、自己点検評価の報告書をまとめております。また、自己点検評価の他にも外部評価を行っております。

外部評価にはいろいろなものがありますが、まず、機関別認証評価というのがありまして、これは独立行政法人大学評価・学位授与機構が行っている評価ですが、7 年に 1 回受審することになっており、本校は、次回は平成 24 年度に受審の予定です。

次に、日本技術者教育認定機構、JABEE というのもあります。JABEE は技術者教育プログラムを認定する機関なのですが、ワシントンアコードという国際的な技術者教育プログラムの認証を受けており、本校は、国際的に認められた技術者教育プログラムを実施していくために JABEE のプログラム認定を受けています。JABEE の認定を受けた教育プログラムは、継続審査を 6 年に 1 回受けることになっており、本校が次に受審するのは平成 26 年ということになっております。

現在、鹿児島高専は独立行政法人国立高等

専門学校機構という法人の中の一つの学校です。平成 16 年度から全国の国立高専がひとつの法人になったわけで、現在この法人のもとに 51 の学校がございます。高専機構は、中期目標、中期計画というのを立てておりますが、平成 21 年度から 25 年度までの 5 年間で第 2 期の中期計画期間で、その中期計画を高専機構が作っております。また各年度の計画も作っております。学校側も、高専機構の中期計画、年度計画に対応して、それぞれの中期計画、年度計画を作り、それらを高専機構に報告しています。そして、年度計画の実施状況についても年度毎に報告し、次の年度の計画を高専機構に提出しているということです。高専機構に中期計画、年度計画、及びそれらの実施状況を提出することも学校側から見れば、ひとつの外部評価であると受け止めています。

さて、今回、皆様に外部評価委員をお引き受けいただいて、鹿児島高専としての外部評価委員会を開催するわけですが、これは、地域の有識者の方々に委員になっていただく外部評価でございまして、地元の有識者の方々のいろんなご意見をいただきたいということが主旨でございます。

始めに申しましたように、3 年毎に自己評価点検結果をまとめるということになっており、丁度今年度がそれをまとめる年度ですので、同じ年度内に外部評価委員会を開催するわけでございます。

今日は追加の資料を配付しておりますけれども、その中に、校長インタビューというのがございます。これは、昨年 7 月の文部科学教育通信に掲載されたものでございます。鹿児島高専の現状であるとか、特色であるとか、今後であるとかについて、私の考えをまとめたものとなっておりますので、参考としてこ

れを追加しました。

それから、追加資料の中に鹿児島高専関連記事というのがございます。これは、鹿児島高専のいろんなアクティビティが地元の新聞などに掲載された記事などをまとめた資料です。このようなデータを高専機構に提出することになっています。高専のPR といえますか、プレゼンスを高めるという観点から、各学校の活動状況が地域の新聞にどのようにとりあげられているのかを機構の方に報告することになっており、これを提出しているわけです。これまでに鹿児島高専から提出したものだけを抜き出してダウンロードすることも出来ます。全 51 国立高専が同じことをやっております、うちの学校はこういうことやって、こういう風にアクティビティが地域に紹介されている、ということを競っているところでございます。

本校でも、こういった、いい意味でのアクティビティを地域の皆様に新聞等通じて知っていただく努力をしていきたいと思っております。

あと、外部評価報告書という A4 サイズの 1 枚の用紙がございます。皆様に外部評価委員をお引き受けいただいた後、かなり分厚い外部評価の報告書というのをお送りしましたが、私は昨年、皆様に、半日来ていただいているんなご意見をいただければよい、それほどお手間は取らせません、と申し上げて外部評価委員をお引き受けいただいたわけですけれども、そのあとあのような分厚い報告書を送付しまして、ちょっと申し訳なかったなと思っています。その後学内でも意見調整したのですが、あの分厚い報告書にはご記入いただくなくても結構で、今日配布しました A4 1 枚に、関心のある分野だけでもまとめていただこうと考えているわけです。この点につきまして

は、今日の最後の方に外部評価委員の方々による話し合いの時間を設けておりますので、その時に、これからまとめていく方法をどうするか、ということをお話し合ってください、決めていただきたいと思います。

今日は、これから学校の紹介を行い、それから施設の視察を計画しております。皆様のご意見を頂戴して、お答えできることは今日お答えしようと思っております。その後、先程申し上げました外部評価委員の方々による打合せの時間を設けております。ということで、いろんなことがこれからのスケジュールに組み込まれておりますが、一応 17:30 終了の予定であり、時間的な制約がございますので、できるだけ効率よく会議を進めていきたいと思っております。

それでは、これから半日になりますが、どうぞよろしくお願いいたします。

委員自己紹介

【栗田総務課長】 ありがとうございます。引き続きまして、外部評価委員をご紹介させていただきます。なお、外部評価委員会規則第 3 条における委員順にご紹介させていただきます。

始めに、国立大学法人鹿児島大学大学院理工学研究科機械工学専攻教授兼当大学教育センター長、門 久義様でございます。続きまして、霧島市教育委員会教育長の高田肥文様におかれましては、ご都合が付かないとのご連絡がございまして本日欠席でございます。続きまして、財団法人かごしま産業支援センター専務理事、時田光一様。

【時田委員】 時田です。よろしくお願い致します。

【総務課長】 続きまして、株式会社トヨタ車体研究所取締役社長兼錦江湾テクノパーククラブ会長、宮村憲一様。

【宮村委員】 宮村でございます。よろしく
お願いします。

【総務課長】 続きまして、株式会社南日本
新聞社霧島総局長、濱田俊二郎様。

【濱田委員】 濱田です。よろしくお願
いします。

【総務課長】 続きまして、消費生活アドバ
イザー兼鹿児島大学経営協議会学外有識者、
石窪奈穂美様

【石窪委員】 石窪でございます。よろしく
お願いいたします。

【総務課長】 続きまして、株式会社相良製
作所代表取締役社長兼鹿児島高専同窓会会長
機械工学科1期生、相良正典様

【相良委員】 相良です。よろしくお願
いします。

【総務課長】 委員の皆様、ありがとうござ
いました。

鹿児島高専出席者 自己紹介

【栗田総務課長】 続きまして、本校の出席
者をご紹介させていただきます。初めに先程
あいさつをいたしました、赤坂校長でござ
います。

【校長】 赤坂です。よろしくお願
いします。

【総務課長】 続きまして、植村教務主事
でございます。

【教務主事】 植村です。よろしくお願
いします。

【総務課長】 続きまして、岡林学生主事
でございます。

【学生主事】 岡林でございます。よろしく
お願いします。

【総務課長】 続きまして、南金山寮務主事
でございます。

【寮務主事】 南金山です。よろしくお願
いします。

【総務課長】 続きまして、原田専攻科長で

ございます。

【専攻科長】 原田でございます。よろしく
お願いいたします。

【総務課長】 続きまして、芝地域共同テク
ノセンター長でございます。

【地域共同テクノセンター長】 芝でござ
います。よろしくお願
いします。

【総務課長】 続きまして、総務企画担当西
留校長特別補佐でございます。

【総務企画担当校長特別補佐】 西留です。
よろしくお願
いします。

【総務課長】 続きまして、国際交流・留学
生担当のあべ松校長特別補佐でございます。

【国際交流留学生担当校長特別補佐】 あべ
松です。よろしくお願
いします。

【総務課長】 続きまして、保坂図書館長
でございます。

【図書館長】 保坂です。よろしくお願
いします。

【総務課長】 続きまして、堂込情報教育シ
ステムセンター長でございます。

【情報システムセンター長】 堂込です。よ
ろしくお願
いします。

【総務課長】 続きまして、松田学生何でも
相談室長でございます。

【学生何でも相談室長】 松田です。よろ
しくお願
いします。

【総務課長】 松田学生何でも相談室長にお
かれましては、本日鮫島一般教育科文系科長
欠席のため一般教育文系科長代理兼任でござ
います。

【総務課長】 続きまして、大竹広報委員
長でございます。

【広報委員長】 大竹でございます。よろ
しくお願
いいたします。

【総務課長】 続きまして、室屋FD委員
長でございます。

【FD 委員長】 室屋です。よろしくお願いいたします。

【総務課長】 続きまして、白坂一般教育科理系科長におかれましては、都合により途中出席とのことでございます。

続きまして、池田機械工学科長でございます。

【機械工学科長】 池田です。よろしくお願いいたします。

【総務課長】 続きまして、須田電気電子工学科長でございます。

【電気電子工学科長】 須田です。よろしくお願いいたします。

【総務課長】 続きまして、宮田電子制御工学科長でございます。

【電子制御工学科長】 宮田です。よろしくお願いいたします。

【総務課長】 続きまして、榎園情報工学科長でございます。

【情報工学科長】 榎園です。よろしくお願いいたします。

【総務課長】 続きまして、前野都市環境デザイン工学科長におかれましては、途中出席とのことでございます。

【総務課長】 続きまして、大園事務部長でございます。

【事務部長】 大園です。よろしくお願いいたします。

【総務課長】 続きまして、浦川学生課長でございます。

【学生課長】 浦川でございます。よろしくお願いいたします。

【総務課長】 続きまして、山下技術長でございます。

【技術長】 山下です。よろしくお願いいたします。

【総務課長】 本校出席者の紹介は以上で

ございます。

資料確認及び会次第説明

【栗田総務課長】 では、議事に入る前に配付資料の確認をさせていただきます。先程本校赤坂校長の方から紹介ございましたが、本日の外部評価委員会の当日配付資料につきましては、後ほどご説明させていただきます。

まず、会議に先立ち、事前に配付した資料について説明させていただきます。既に一読されていると思いますが、ご確認をお願いします。外部評価委員会の資料といたしまして、資料1が「本校の特色」、資料2が「自己点検・評価報告書の概要」、資料3が冊子になっておりましたが「自己点検・評価報告書 第6号」、資料4が「平成19年度の外部評価委員からの提言に対する本校の対応」、資料5が「平成22年度鹿児島工業高等専門学校」の学校要覧」でございました。ご確認のほどよろしくお願いいたします。

続きまして、本日の当日配付資料でございます。まず、外部評価委員の方々にお配りしているものでございまして、資料といたしましては「平成22年度鹿児島工業高等専門学校の外部評価委員会の日程」、その次に「外部評価委員会の学校概要の説明資料」、本日こちらは植村教務主事によりパワーポイントを使いまして説明させていただきます。3点目で「外部評価報告書」、4点目で、「鹿児島高専の関連記事」、最後でございますが「文部科学教育通信248号抜粋で赤坂校長のインタビュー」がございます。以上でございます。本校の教員の分も同じでございますが、外部評価報告書は入っておりません。

次に、本日の日程についてご説明させていただきます。当日配付資料の2枚目でございます。平成22年度鹿児島工業高等専門学校外部評価委員会の日程でございますが、13:30

開会でございます。13:47 過ぎに委員長の選出を行いまして、13:50 から 14:30 頃まで学校概要の説明を行いたいと思います。こちらは教務主事から説明していただきます。それが終わりましたら 14:30 から約 30 分ではございますが校内の視察を予定しております。15:00～15:10 まで休憩といたします。それが終わりましたら、15:10 から 16:10 の 1 時間でございますが意見交換及び質疑応答を予定しております。終了後 16:10 から 17:20 の約 70 分間ですが、外部評価委員の打合せでございます。ここはお隣が小会議室でございますので、その時になりましたらご案内させていただきます。終了後閉会となります。日程の説明については以上でございます。資料等よろしいでしょうか。

委員長選出

【栗田総務課長】では、委員長選出に入らせていただきます。外部評価委員会規則第 4 条により、「委員会に委員長を置き、委員の互選により選出する。」とあります。

この規程に基づき、委員長選出を行いたいと思いますが、互選ということになっておりますので、どなたか委員長をお引き受けいただける方はおられませんでしょうか。

お名前が上がりませんでしたので、本校から鹿児島大学の門先生を委員長としてご推薦したいのですが、委員の皆様いかがでしょうか。

(※「異議なし」との声あり)

【栗田総務課長】了承されましたので、門先生に外部評価委員会の委員長として就任していただきます。門先生よろしくお願いいたします。

では、委員長、委員長席の方にご移動お願いいたします。

それでは、進行を委員長に引継ぎますので

委員長よろしくお願いたします。

委員長あいさつ

【門委員長】ただいま選出していただきました、外部評価委員会の委員長を務めさせていただきます鹿児島大学の門と申します。

外部評価委員会というのは評価される側にもいろいろあって、なかなかプレッシャーとなるものですが、基本的にこういったものは組織が次のステップへ発展していく為の一つの方法として考えております。そういった形で評価についてもますます高専が発展していくような方向で意見を交えて検討したいと思っておりますので、今日の夕刻までどうぞよろしくお願いいたします。

学校概要説明

【門委員長】それでは、学校概要について説明をお願いいたします

植村教務主事の説明

【植村教務主事】

—説明は、パソコンのプレゼンテーションソフト Microsoft PowerPoint で、映写しながら行いました。文中の「こちら、この図」などの発言は、スクリーン画面を指し示しながら説明したものです。—

学校概要

外部評価委員会
平成23年2月24日

報告内容

- 自己点検における評価基準
- 学校概要説明
- 学生支援
- 学生寮
- 地域貢献(地域共同テクノセンター)
- 本校の特徴

それではただ今から学校概要について説明させていただきます。私、教務主事の植村と申します。当初、持ち時間 40 分あったのですが 14 時 30 分までの予定ということで、あと 30

分しかございませんので、いくつか端折らせていただくかもしれません。説明事項がかなりの分量になってしまっていて、かなり早口になるかもしれませんがよろしくお願ひします。

報告内容はここにありますように、「自己点検における評価基準」「学校概要の説明」「学生支援」「学生寮」「地域貢献とくに地域共同テクノセンター」について、でございます。最後に資料1にあります「本校の特徴」でございます。

自己点検における評価基準

まず「自己点検における評価基準」について、でございますが、基準1から基準9まで、基準8と基準10,11を除いたものでございます。自己点検に当たりまして基準としたものでございます。

基準1 高等専門学校の目的
観点1 高等専門学校の目的（高等専門学校の使命、教育研究活動を実施する上での基本方針、及び、養成しようとする人材像を含めた、達成しようとしている基本的な成果等）が明確に定められており、その内容が、学校教育法に規定された、高等専門学校一般に求められる目的から、はずれるものではないこと。
観点2 目的が、学校の構成員に周知されているとともに、社会に公表されていること。

基準1は高等専門学校の目的ということについて2つの観点から高等専門学校の目的が明確に定められており、そしてそれが周知されて公表されているかどうかという観点でございます。

基準2 教育組織（実施体制）
観点1 学校の教育に係る基本的な組織構成（学科、専攻科及びその他の組織）が、目的に照らして適切なものであること。
観点2 教育活動を展開する上で必要な運営体制が適切に整備され、機能していること。

基準2が教育組織ですけれども、学校の教育に係る基本的な組織構成が適切かどうか、また必要な運営体制が適切に整備され、機能しているかどうかの観点です。

基準3 教員及び教育支援者
観点1 教育課程を遂行するために必要な教員が適切に配置されていること。
観点2 教員の採用及び昇格等に当たって、適切な基準が定められ、それに従い適切な運用がなされていること。
観点3 教育課程を遂行するために必要な教育支援者等が適切に配置されていること。

基準3の教員及び教員支援者に関することでございますが、必要な教員が適切に配置されており、教員の採用及び昇格等に当たって、適切な基準が定められ、それに従い適切な運用をしているか、必要な教育支援者等が適切に配置されているかどうかの観点でございます。

基準4 学生の受入

観点1 教育の目的に沿って、求める学生像及び入学者選抜の基本方針等の入学者受入方針（アドミッション・ポリシー）が明確に定められ、公表、周知されていること。

観点2 入学者の選抜が、入学者受入方針（アドミッション・ポリシー）に沿って適切な方法で実施され、機能していること。

観点3 実入学者数が、入学定員と比較して適正な数となっていること。

基準4は学生の受入に関しまして入学者受入方針（アドミッション・ポリシー）が明確に定められ、公表、周知されており、なおかつ入学者の選抜が、適切な方法で実施され、実入学者数が、入学定員と比較して適正な数となっているという観点でございます。

基準5 教育内容及び方法

（本科）

観点1 教育課程が教育の目的に照らして体系的に編成されており、その内容、水準が適切であること。

観点2 教育課程を展開するにふさわしい授業形態、学習指導法等が整備されていること。

観点3 成績評価や単位認定、進級・卒業認定が適切であり、有効なものとなっていること。

観点4 人間の素養の涵養に関する取組が適切に行われていること。

（専攻科）

観点5 教育課程が教育の目的に照らして体系的に編成されており、その内容、水準が適切であること。

観点6 教育課程を展開するにふさわしい授業形態、学習指導法等が整備されていること。

観点7 教養教育や研究指導が教育の目的に照らして適切に行われていること。

観点8 成績評価や単位認定、修了認定が適切であり、有効なものとなっていること。

基準5が教育内容及び方法となっておりますが、本科と専攻科だいたい同じような観点で設けられております。教育課程が、体系的に編成されており、さらに授業形態、学習指導法等が整備され、さらに成績評価や単位認定、進級・卒業認定が適切であり、有効なものであるかどうか。さらに人間の素養の涵養に関する取組。専攻科では教養教育。こういったものが適切に行われているかどうかという観点になっております。

基準6 教育の成果

観点1 教育の目的において意図している、学生が身に付ける学力、資質・能力や養成しようとする人材像等に照らして、教育の成果や効果が上がっていること。

基準6は教育の成果でございまして、教育の目的において意図しているものが、教育の成果や効果が上がっているかという観点。

基準7 学生支援等

観点1 学習を進める上での履修指導、学生の自主的学習の相談・助言等の学習支援体制が整備され、機能していること。また、学生の課外活動に対する支援体制等が整備され、機能していること。

観点2 学生の生活や経済面並びに就職等に関する相談・助言、支援体制が整備され、機能していること。

基準7は学生支援等に関することとなります。履修指導、学生の自主的学習、これらの学習支援体制が整備されているかということ。また、学生の生活や経済面、就職等に関する支援体制が整備され、機能しているかどうかという観点。

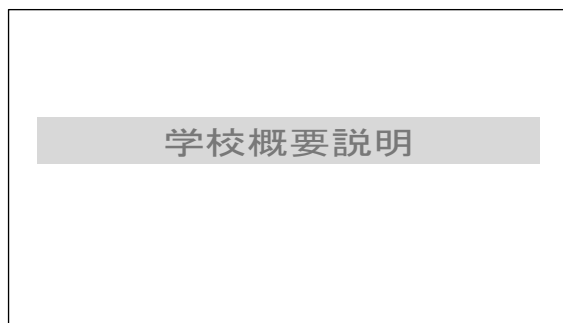
基準9 教育の質の向上及び改善のためのシステム

観点1 教育の状況について点検・評価し、その結果に基づいて改善・向上を図るための体制が整備され、取組が行われており、機能していること。

観点2 教員及び教育支援者等の資質の向上を図るための取組が適切に行われていること。

最後に基準9ですが、教育の質の向上及び改

善のためのシステム。これらについて点検・評価し、更に改善・向上を図るための体制が設備されているか、あるいは教員及び教育支援者等の資質の向上を図るための取組が適切に行われているかどうか。という今回主に、教育に関する内容に絞って評価しております。



では次に、学校概要の説明と入らせていただきます。



こちらは中学生の皆さん、中学校の先生方、保護者に説明しているものを紹介させていただきます。



こちらが本校の所在地ですが、霧島市に位置しておりまして、ちょうど霧島から桜島

を見た航空写真になります。面積は甲子園球場の約3倍ございます。こちら側が教育研究棟で、ここが体育館、こちらに寮がございます。

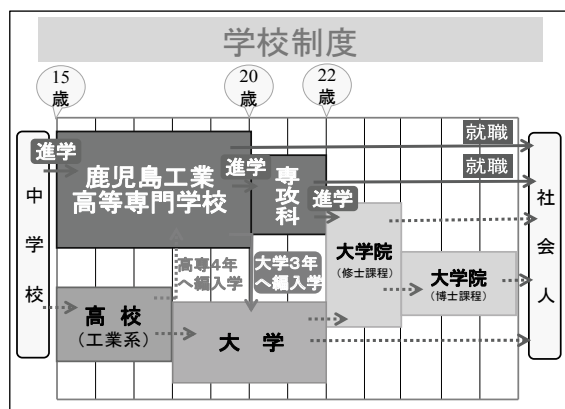
高専(高等専門学校)とは

- ▶ 技術者を志す人たちのための高等教育機関
- ▶ 高等学校から大学卒業までのレベルの教育課程を5年間一貫で学習
- ▶ 充実した設備と少人数教育

<高等教育機関の種類>

高専(中学卒業後5年)	→	準学士
高専(専攻科2年)	→	学士
短大(高校卒業後2年)	→	短期大学士
大学(" 4年)	→	学士

高専。正式名称は高等専門学校ですが、高専とは、技術者を志す人たちのための高等教育機関で、大学と同じ範疇に入ります。特徴といたしまして、高校から大学卒業レベルの教育課程を5年間一貫で学習し、さらに充実した設備と少人数教育を行っております。高専を5年間で卒業しますと準学士の称号を与えられまして、さらに専攻科を修了しますと大学と同じ学士という称号が与えられます。



学校制度ですが、中学校を卒業した生徒は大半が高校に進学し、さらに大学まで進学して就職するという課程を辿りますが、技術者を目指す中学生の中で高専に進学し、5年間一般教育課程、専門課程を学んで5年で卒業します。高専の特徴は、この卒業時に選択肢の幅が非常に広いものでして、だいたい6割か

ら7割の学生が就職をしまして、残りの3割から4割が進学しますが、進学先としまして専攻科並びに大学の3年次へ編入学します。専攻科へ進学した学生のうち半数が就職し、残りの学生が大学院の方へ進学します。このように高専を卒業した後の選択肢の幅が非常に広いというのが特徴となっています。

鹿児島高専の目的と教育理念

目的(学則第1条)

本校は、教育基本法にのっとり、及び学校教育法に基づき、深く専門の学芸を教授し、職業に必要な能力を育成することを目的とする。

目的を達成するための教育理念

- ①幅広い人間性を培い、豊かな未来を創造しうる開発型技術者を育成する。
- ②教育内容を学術の進展に対応させるため、また、実践的技術の発展のため、必要な研究を行う。

まず、鹿児島高専の目的と教育理念ですが、目的については学則の第1条に基づいておまして、深く専門の学芸を教授し職業に必要な能力を育成することを目的としております。この目的を達成するための教育理念として2つ掲げております。幅広い人間性を培い、豊かな未来を創造しうる開発型技術者を育成、及び教育内容を学術の進展に対応させるため、また、実践的技術の発展のため、必要な研究を行うとなっております。

鹿児島高専の教育目標

●本校が学生の教育に関して達成すべき具体的目標

国際性を持った教養豊かな人間を育て、個性的で創造性に富んだ開発型技術者を育成する。

●養成すべき人材像としての学習・教育目標

1. 人類の未来と自然との共存をデザインする技術者
2. グローバルに活躍する技術者
3. 創造力豊かな開発型技術者
4. 相手の立場に立ってものを考える技術者

更に教育目標ですけれども、本校が学生の教育に関して達成すべき具体的目標としましては、国際性を持った教養豊かな人間を育て、

個性的で創造性に富んだ開発型技術者を育成する。そのために具体的な学習・教育目標としまして、4つを掲げております。人類の未来と自然との共存をデザインする技術者、グローバルに活躍する技術者、創造力豊かな開発型技術者、最後に相手の立場に立ってものを考える技術者ということで、4つの柱を立てております。

入学者の受け入れ方針(アドミッションポリシー)

本校の学習・教育目標に共感し、この目標達成にふさわしい素質と能力のある人を受け入れます。特に次のような人を求めています。

- ① 論理的な思考ができる人
- ② もの作りが好きな人
- ③ プレゼンテーション能力のある人
- ④ 21世紀の世界を支える技術者として、大いに活躍したいという夢のある人

入学者の受入方針、アドミッションポリシーですけれども、これについては中学校の訪問、中学校の先生方に説明をしております。本校が求めている人材としては、論理的な思考が出来る人、もの作りが好きな人、プレゼンテーション能力のある人、そして21世紀の世界を支える技術者として、大いに活躍したいという夢のある人、こういった人に是非来ていただきたい。特に中学生にはPRをしております。

学生数

平成22年3月31日現在

	学科名及び専攻名	入学定員	入学者数	在籍学生数
本 科	機 械 工 学 科	40名	42名(1名)	210名(2名)
	電 気 電 子 工 学 科	40名	43名(1名)	206名(13名)
	電 子 制 御 工 学 科	40名	41名(2名)	216名(6名)
	情 報 工 学 科	40名	45名(15名)	201名(56名)
	土 木 工 学 科	40名	43名(4名)	211名(13名)
	合 計	200名	214名(23名)	1044名(90名) 8.6%
専 攻 科	機械・電子システム工学専攻	8名	13名	25名
	電気情報システム工学専攻	8名	11名(3名)	16名(3名)
	土木工学専攻	4名	7名	13名
	合 計	20名	31名(3名)	54名(3名)

※()は女子で内数

次に学生数ですが、こちらは平成22年の3月31日現在です。本科と専攻科ですけれども、

機械工学科、電気電子工学科、電子制御工学科、情報工学科、土木工学科それぞれ定員 40 名です。これに対しまして入学者は 210 名となっております。括弧の中の内数は女子生徒の数です。全校学生が 1044 名うち女子学生が 90 名で、割合といたしましては、8. 6% となっております。専攻科については 20 名の定員に対して、1 年生が 31 名。 1、2 年生併せて 54 名うち女子学生は 3 名となっております。

本科	
機械工学科	ロボットからロケットまで ものづくりの原点
電気電子工学科	エネルギーとエレクトロニクス、 そしてエコ
電子制御工学科	目指せ！ オールラウンド・エンジニア！
情報工学科	情報化社会のバイオニア
都市環境 デザイン工学科	安全な都市環境をデザインし、人々 が安心して暮らせる都市づくり

本科についてですが先程申し上げましたように機械工学科、電気電子工学科、電子制御工学科、情報工学科、そして本年度の 4 月から従来の土木工学科から都市環境デザイン工学科と名称変更しております。

カリキュラム	
各学科の専門科目は、全学科共通の応用数学のような工学基礎、各学科独自の専門科目、さらにコンピュータ関連科目から構成されています。さらに、大学と同じように5年生で1年間、卒業研究に取り組みます。	
電気・電子工学	電気・電子工学 情報システム
機械工学科	工学基礎 機械工学 製造・実験・実習 卒業研究
電気電子工学科	工学基礎 電気・電子工学 情報システム 計測制御 製造・実験 卒業研究
電子制御工学科	工学基礎 電気・電子工学 情報システム 計測制御 機械工学 製造・実験・実習 卒業研究
情報工学科	工学基礎 電気・電子工学 情報システム 計測制御 製造・実験・実習 卒業研究
都市環境デザイン工学科	工学基礎 製造材料系・空間デザイン系・環境バイオ系 製造・実験・実習 卒業研究

本科のカリキュラムですけれども 5 学科について工学基礎、製図・実験・実習、卒業研究については共通ですけれども、機械工学科においては機械工学をベースとしたカリキュラム。電気電子工学科においては電気・電子工学をベースとしたカリキュラム。電子制御工学科においては複合科的な要素がありますが、

電気・電子工学、情報システム、計測制御、機械工学、という風にバランスの取れたカリキュラムとなっております。情報工学科においては情報システムにベースとしたカリキュラム。都市環境デザイン工学科においては、構造材料系・空間デザイン系・環境バイオ系をベースとしたカリキュラムとなっております。

本科卒業後の進路 (平成21年度)	
卒業生数 205名	
就職者数 137名 (66. 8%)	大学・高専専攻科進学先 (H21年度)
求人倍率: 14. 2倍	鹿児島高専(専攻科) 3 4名
進学者数 64名 (31. 2%)	九州工業大学 9名
※進学者数は、短大・専門学校への進学者は除く	鹿児島大学 6名
	熊本大学 5名
	豊橋技術科学大学 3名
	長岡技術科学大学 2名
	東京工業大学 1名
	九州大学 1名
	千葉大学 1名
	愛媛大学 1名
	第一工業大学 1名
その他 4名 (1. 9%)	
主な進学先:	
鹿児島高専専攻科	
国立大学工学部 (3年次編入)	

本科卒業後の進路でございますが、こちらは平成 21 年度の実績でありますけれども、卒業生数 205 名でございました。そのうち 66. 8%。これは年度によって違うのですけれども、大体 60~70% の学生が就職しております。求人倍率も 14. 2 倍と、大学よりもはるかに高い倍率ということが特徴となっております。残りの 3 割から 4 割の学生が進学をしております。平成 21 年度の主な進学先の一覧がこちらとなっておりますが、大半は本校の専攻科に進学しております。

専攻科													
<ul style="list-style-type: none"> ▶ 本科における5年間の高専の教育を生かしながら ▶ 産業界が求める生産現場などで実践的に問題解決ができ ▶ 最先端の技術にも精通した創造力豊かな開発型技術者の育成を目指す。 ▶ 科学技術の高度化、情報化及び国際化に対応した実践的工学知識と技術、 ▶ さらに特に近年必要とされる環境問題に関する知識を教育する。 	<table border="1"> <thead> <tr> <th>本科 The regular course</th> <th>専攻科 The advanced Engineering course</th> </tr> </thead> <tbody> <tr> <td>機械工学科 Department of Mechanical Engineering</td> <td>機械・電子システム工学専攻 Advanced Mechanical and Electronic Systems Engineering</td> </tr> <tr> <td>電子制御工学科 Department of Electronic Control Engineering</td> <td>電気情報システム工学専攻 Advanced Electrical and Information Systems Engineering</td> </tr> <tr> <td>電気電子工学科 Department of Electrical and Electronics Engineering</td> <td>電気情報システム工学専攻 Advanced Electrical and Information Systems Engineering</td> </tr> <tr> <td>情報工学科 Department of Information Engineering</td> <td>電気情報システム工学専攻 Advanced Electrical and Information Systems Engineering</td> </tr> <tr> <td>都市環境デザイン工学科 Department of Urban Environmental Design and Engineering</td> <td>土木工学専攻 Advanced Civil Engineering</td> </tr> </tbody> </table>	本科 The regular course	専攻科 The advanced Engineering course	機械工学科 Department of Mechanical Engineering	機械・電子システム工学専攻 Advanced Mechanical and Electronic Systems Engineering	電子制御工学科 Department of Electronic Control Engineering	電気情報システム工学専攻 Advanced Electrical and Information Systems Engineering	電気電子工学科 Department of Electrical and Electronics Engineering	電気情報システム工学専攻 Advanced Electrical and Information Systems Engineering	情報工学科 Department of Information Engineering	電気情報システム工学専攻 Advanced Electrical and Information Systems Engineering	都市環境デザイン工学科 Department of Urban Environmental Design and Engineering	土木工学専攻 Advanced Civil Engineering
本科 The regular course	専攻科 The advanced Engineering course												
機械工学科 Department of Mechanical Engineering	機械・電子システム工学専攻 Advanced Mechanical and Electronic Systems Engineering												
電子制御工学科 Department of Electronic Control Engineering	電気情報システム工学専攻 Advanced Electrical and Information Systems Engineering												
電気電子工学科 Department of Electrical and Electronics Engineering	電気情報システム工学専攻 Advanced Electrical and Information Systems Engineering												
情報工学科 Department of Information Engineering	電気情報システム工学専攻 Advanced Electrical and Information Systems Engineering												
都市環境デザイン工学科 Department of Urban Environmental Design and Engineering	土木工学専攻 Advanced Civil Engineering												

次に専攻科についてですが、本科における 5

年間の高専の教育を生かしながら、産業界が求める生産現場などで実践的に問題解決ができ、更に最先端の技術にも精通した創造力豊かな開発型技術者の育成を目指しております。具体的には科学技術の高度化、情報化及び国際化に対応した実践的工学知識と技術、さらに特に近年必要とされる環境問題に関する知識を教育しております。専攻科には機械・電子システム工学専攻、電気情報システム工学専攻、土木工学専攻と3専攻がございまして、それぞれ機械・電子システム工学専攻には機械工学科と電子制御工学科を卒業した学生が、電気情報システム工学専攻には電気電子工学科、情報工学科を卒業した学生が、土木工学専攻へは都市環境デザイン工学科を卒業した学生が進学することができます。

専攻科

- ・本科卒業生が進学できる2年制の専門課程。
- ・問題解決型の実践的教育研究や産学連携による共同教育。
- ・専攻科修了と同時に大学卒業と同じ『学士』の学位を取得できる。
- ・学士を取得した人は国公立の大学院へ進学できる。多くの学生が推薦で進学。

中学校卒業後、学士取得までの授業料及び入学料調べ

高専⇒高専専攻科

授業料総額 1,285,800 + 入学料総額 169,200 = **1,455,000**

公立高校⇒国立大学

授業料総額 2,143,200 + 入学料総額 287,650 = **2,430,850**

経費の差額 約98万円

こちらの下の表ですが、中学校を卒業しまして、学士取得までの授業料及び入学料調べにおいて高専と国立大学を卒業した場合を比較したものです。学士を取得するには2つのコースがあるわけですが、高専に入学しまして専攻科へ進学した場合と、高校から国立大学へ進学した場合になります。この両方を比較しますと高専専攻科を修了した場合、授業料総額、入学料総額を合わせておよそ1,455,000円かかりますが、国立大学を修了した場合は243万円となってその差額は100万円弱となり、かなり大きな差額として出てきます。従いまして、専攻科を修了して学士

を取ったほうが経済的にも安いということが判っております。

専攻科修了後の進路 (平成21年度)

大学院進学先(過去5年間)

修了生数 20名	九州工業大学大学院	12名
就職者数 11名 (55.0%)	名九州大学大学院	8名
求人倍率 :40.4倍	早稲田大学大学院	3名
進学者数 9名 (45.0%)	名古屋大学大学院	2名
主な進学先:	北陸先端科学技術大学院大学	3名
国立大学大学院	長岡技術科学大学大学院	3名
	鹿児島大学大学院	3名
	東京大学大学院	2名
	東北大学大学院	1名
	熊本大学大学院	1名
	豊橋技術科学大学院大学	1名
	奈良先端科学技術大学院大学	1名
	福岡大学大学院	1名

次に専攻科修了後の進路ですけれども、平成21年度については20名の修了生がおります。約半数の学生が就職。求人倍率が40.4倍と非常に高いわけですが、求人数そのものは本科と変わらないわけですけれども学生数が少ないもので高い数字が出ております。残りの学生が進学で、こちらは過去5年間の大学院への進学先になります。尚、今年の2年生でも東京大学の大学院に1名の進学が決まっております。

学校行事



次に学校行事でございまして、これは今年度の高専体育大会がございまして、

2010高専体育大会 (全国・九州沖縄地区)

	全国大会	九州沖縄地区大会
1位	・ソフトテニス(団体)	・サッカー・ソフトテニス(団体) ・テニス(団体)・水泳(個人4種目) ・陸上競技(個人1種目) ・ソフトテニス(個人1種目) ・テニス(個人2種目)
2位	・テニス(団体)・サッカー ・ソフトテニス(個人1種目) ・水泳(団体1種目)	・陸上競技(個人2種目) ・水泳(個人2種目) ・ソフトテニス(個人2種目) ・テニス(個人2種目)



その九州沖縄地区の成績と全国大会での成績でございます。こちらが九州沖縄地区で優勝したチーム。サッカー、ソフトテニス、テニス、水泳、陸上競技、個人種目、団体種目で優勝しております。準優勝は陸上競技、水泳、ソフトテニス、テニスでございます。準優勝以上の種目については全国大会へ進むことができ、その中でソフトテニスが優勝しております。テニス、サッカー、ソフトテニス、水泳といったものが準優勝をしております。このように本校ではクラブ活動がとても盛んでございます。

高専ロボコン2010 (全国大会)

(アイデア対決ロボットコンテスト)

今年のロボコンは、2足歩行ロボットが、乗り物に乗った人をゴールまで運ぶ速さを競う競技

優勝!! 鹿児島高専 Bチーム
【Rose Road(ローズロード)】

【過去の実績】

2008年 九州沖縄地区大会

準優勝・アイデア賞

特別賞

全国大会

アイデア賞・特別賞

2009年 九州沖縄地区大会

準優勝・特別賞



優勝した鹿児島高専Bチーム

こちらの方は、高専ロボコンということで、今年度の全国大会の結果ですが、皆様ご存じのとおり今年度、本校は全国大会初優勝いたしました。TV、新聞等でたくさん取り上げていただいて、これについては本校のPRに貢献したという風に思っております。過去の実績ですが、2008年においては準優勝。また2009年においても地区大会で準優勝と最近、鹿児島高専のロボコンが力をつけてきている

と全国的にも評判でございます。

入試統計

平成22年4月現在

	学 科 名	入学定員	志願者数	志願倍率	入学者数	入学者平均点
本 科	機械工学科	40	69(1)	1. 7	42(0)	378. 0
	電気電子工学科	40	76(2)	1. 9	42(1)	390. 6
	電子制御工学科	40	50(0)	1. 3	41(0)	393. 0
	情報工学科	40	60(8)	1. 5	42(5)	415. 9
	都市環境デザイン工学科	40	70(12)	1. 8	42(8)	348. 2
	合 計	200	325(23)	1. 6	209(14)	383. 7

※志願者数は、第一志望の人数(推薦入試の志願者も含む)

※()は女子で内数

※入学者平均点は、600点満点での点数(数学は200点満点で計算)

これは、入試統計ですが、中学生、中学校の先生方にお知らせしているものでございます。入学定員 200 名におきまして、今の1年生ですけれども 325 名の志願者がありました。志願倍率 1.6 倍となっております。入学試験は 2 つございまして、推薦選抜、そして次に説明します学力選抜になります。

入学試験 <推薦選抜>

・推 薦 枠： 各学科 12 名程度

・推薦基準： (1) または (2) の条件を満たす者

推薦基準	中学校又は中等教育学校前期課程における3年次の1～2学期9教科5段階評価の総計	その他
(1)の条件	90～76	
(2)の条件	72以上	生徒会長経験者や部活動等で優秀な成績を修めた者

・作文【字数800字以内】・面接【10分程度】

・工学適性検査【30分程度の数学的適性検査(筆記)】

推薦選抜においては各学科の3割、12名程度の推薦枠がございまして、推薦基準は2つございます。これは中学校3年次の1学期、2学期の9教科の5段階評価の総計が76以上のもの。または、76に達しなくても生徒会長経験者、部活等で優秀な成績を修めた者においては72以上あると推薦が可能となっております。推薦入学においては作文、面接、工学適性検査を実施しております。

入学試験 <学力選抜>

- ・募集人員：各学科 40名
【推薦によるもの(12名程度)を含む】
- ・試験科目：5科目
英語、数学、国語、理科、社会
- ・試験時間：各50分
- ・配点：600点満点
数学200点、他教科100点

【過去問題掲載場所】

鹿児島高専ホームページ » コンテンツ » 入試情報 » 過去問題
<http://www.kagoshima-ct.ac.jp/contents/examination/post-30.html>

一方学力選抜ですけれども、募集定員は先程申し上げましたとおり各学科 40 名ですが、この中には推薦による者も含んでおります。試験科目は 5 科目で試験時間は 50 分。600 点満点となっておりますが、傾斜配分で数学が 100 点を単純に倍にして 200 点、他教科 100 点で 600 点満点でございます。過去問についてはホームページのほうでも生徒は見る事が出来ます。

就学支援金制度(高校授業料無償化法)

本科1年生～3年生(入学後36ヶ月間):就学支援金制度において私立高校区分に該当し、就学支援金の支給対象

※C(授業料納付額)=A-B

	A:年間授業料	B:就学支援金	C:授業料納付額
一般世帯	234,600円	118,800円	115,800円 前期:57,900円 後期:57,900円
市町村民税の所得割額(課税額)が18,900円未満世帯	234,600円	178,200円	56,400円 前期:28,200円 後期:28,200円
市町村民税の所得割額(課税額)が非課税世帯	234,600円	234,600円	0円

○本科4・5年生・・・年間授業料は、234,600円となります。授業料免除の対象になります。

※授業料免除
 経済的理由により、授業料の納付が困難であり、かつ学業優秀と認められる学生に対し、選考の上、授業料の全額若しくは、半額を免除します。

就学支援金制度ですが、いわゆる高校授業料無償化法ですけれども、本科の1年生から3年生までは就学支援金制度の対象になります。該当区分としましては私立高校区分ですね。世帯収入に応じて3つあるわけですが、年間の授業料が234,600円一般世帯で118,800円の就学支援となり、残りを前期と後期と分けてお支払いいただくというかたちになります。その他178,200円の就学支援。ですので56,400円の授業料納付。更には全額就学支援にされる家庭におかれては、授業料をいただかない。ただ本科の4,5年生においては

234,600円の授業料ですけれども、授業料の免除制度がございまして経済的理由により、授業料の納付が困難である学生は授業料免除の制度もございます。

鹿児島高専 一日体験入学(8月実施)



機械工学科

電気電子工学科

電子制御工学科

- ・授業で実際行っている実験・実習の一部を体験
- ・進学相談 ・校内の自由見学 ・寮昼食を試食



情報工学科



都市環境デザイン工学科

これは、中学生向けの一日体験入学のもので8月に実施したものでありますが、一日体験入学はここにごございますように、授業で実際行っている実験・実習の一部を体験してもらったり、あるいは進学相談・校内の自由見学・寮昼食を試食してもらっております。

中学生及び保護者のための学校説明会

- ・霧島市会場
 日時:10月2日(土)14:00～16:00
 会場:鹿児島工業高等専門学校
 (学生共通棟2階 大講義室)
- ・鹿児島市会場
 日時:10月24日(日)14:00～16:00
 会場:かごしま県民交流センター
 (東棟3階 大研修室1)

※ 事前申し込みは不要です。ご参加お待ちしております。

これは、今年度から初めて取り組んだ試みでございますが、中学生及び保護者のための学校説明会を霧島市会場と鹿児島市会場で行わせていただきました。この2会場については本校の在校生の占める割合が霧島市地区そして鹿児島市地区が多いということで、ここの特に保護者を対象に、そして中学生を対象に説明会を設けました。どれくらい集まるか分からなかったのですが、予想を超えてたくさんの中学生や保護者の方に来ていただいて、かなりの効果だったと思っております。

セメスター制の導入

本校のいうセメスター制

- 平成19年度から実施
- 1年を前学期(春セメスター・4月～9月)と後学期(秋セメスター・10月～3月)の二期に分け前学期の期末試験を夏休み前に終了。
- 平成21年度は8月10日から夏休みに入り、後期授業は10月1日開始、2月29日終了。

次に本校におけるセメスター制度ですが、平成19年度から実施しておりまして、1年間を前期と後期に分けるセメスター制を取っております。前期は夏休み前に試験を終了し、後期においては2月29日に終了をする、というセメスター制を取っております。

学習支援

低学年学生の基礎学力の定着指導として、中学校や学習塾での受動的学習方法と、本校教育の能動的学習方法は異なる。これらの学習方法の異なる歯車が継続的に噛み合うように、学生は通常の授業に加えて補習等で指導する必要がある。

1) 平常補習

低学年における学習未到達者に対し、科目担当者が放課後実施する補習。

2) 試験前補習

中間・期末の試験前に科目担当者の申し出により、放課後に時間割を作成し、希望する学生に実施する補習。

3) 課外補習

・夏期休業中の最後の5日間に1、2年生の数学と英語の学習未到達者に対して学力向上に向けて実施する補習。

・各学年20名程度で科目担当教員のほか専門学科の若手教員による授業に加え専攻科学生のティーチングアシスタント(TA)による個別の演習指導。

あと学習支援ですけれども、この3つの学習補習を取っております。まず平常補習これは放課後に科目担当が行う補習。次に試験前補習といいまして中間・期末の試験前にこれは放課後に時間割を作成してする補習。最後に課外補習としまして夏期休業中に1,2年生に数学と英語の学習未到達者に向けて行う補習。ここで専攻科生のティーチングアシスタントを加えて個別指導をしています。

授業評価アンケート及び授業参観

・ 授業評価アンケート

- 各学期の終わりに学生に授業評価アンケートを実施
- 各教員はその結果を基に授業改善計画を提出して、授業改善を行っている。

・ 授業参観

- 保護者に対し、授業参観の機会を設けている。
- 教員に対しても、教員相互の授業視察を行い、意見などを記述している。
- 授業評価アンケートで評価の高い先生を公開し、授業視察の機会を設けている。

本校では授業評価アンケート及び授業参観を行っておりますが、これは各学期の終わりに授業評価アンケートを実施しております。先生方はその結果を基に授業改善計画を提出して、授業改善を行っていただいております。また授業参観も保護者に対して、授業視察の機会を設けているのと同時に教員相互の授業参観を行っております。さらに授業評価アンケートで評価の高い先生方の名前を公開して、授業視察の機会を設けております。

海外語学研修および学生交流

国際化の流れにあつては、外国語によるコミュニケーション能力を身に付けることは極めて重要であり、本校でも、この能力を身に付けた技術者を育成すべき技術者像としている。

このような背景を踏まえ、この研修は、低学年のできるだけ早い時期に、学生に海外での生活や海外の学校での授業を体験させることで、今後の英語学習への意欲を高めてもらうこと(動機付け)を主な目的として、17年度より実施されているものである。

●第5回 海外語学研修

日時：平成21年9月23日(日)～9月30日(月)

場所：カナダバンクーバーホームステイと現地高校訪問

●第1回 シンガポールポリテクとの学生交流

相手校：テマセク・ポリテクニクの学生

日時：平成21年9月4日(金)～13日(日)

平成22年3月30日(火)～4月4日(日)

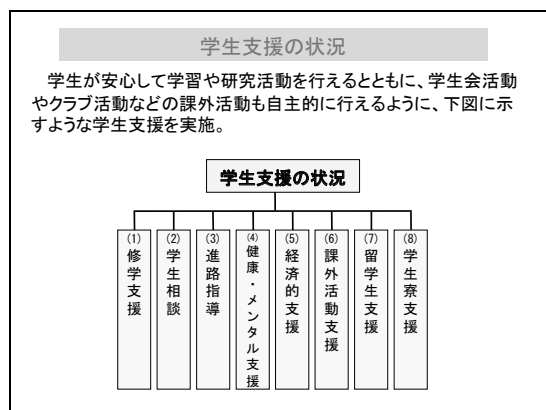
場所：シンガポール・テマセクポリテクニクおよび本校

最後に海外語学研修及び学生交流ですが、本校の学習教育目標の2番目でグローバルに活躍する技術者の育成ということで、低学年の出来るだけ早い時期に、海外での生活や海外の学校での授業を体験させることで英語学習への意欲を高めてもらうということでやっておりますが、平成17年度より実施されております。昨年は第5回の海外語学研修で、これはカナダのバンクーバーにおいてホームステ

イと現地高校訪問と授業を受けております。昨年度からシンガポールのポリテクの学生交流をはじめております。昨年度第1回目でした相手校としまして、テマセクポリテクの学生で、日時としては9月4日から13日まで本校の学生が訪問し、3月末から4月頭にかけては、ポリテクの学生が本校を訪問いたしました。



次に学生支援ですけれども、



先程もちよっと出てきましたが、学習支援あるいはクラブ活動支援などの支援体制がこのように整っております。修学支援、学生相談、進路指導、健康・メンタル支援、経済的支援、課外活動支援、留学生支援、学生寮支援といったものでございます。

(1) 修学支援

- 1) 学級担任制
学生の学習面や生活面、経済面に関する指導・助言
- 2) オフィスアワーズ
「学生のための時間帯」を全教員が設定し、学生の学習や生活に関すること等の相談に応じる制度
各教員が週2回、1~2時間のオフィスアワーズを設定
- 3) 教員によるチューター制
第1学年の学生に対して、各学科の教員が専門教育に関する動機付けやアドバイスおよび学習指導等を実施
- 4) オリエンテーションの実施
年度初めに、学習や生活に関するオリエンテーションや、集団研修(1年次)を実施

修学支援としまして、学級担任制。学生の指導の最前線に立って指導する担任ということでございます。オフィスアワーズについては、各教員が週2回程、放課後に1~2時間のオフィスアワーズの時間を設定しておりまして、この時間に学生は来て下さいということで、これを教員のドアに札を貼っております。また教員によるチューター制。これは専門学科の教員が低学年の1年生の学生に対して学習指導等あるいは専門教育に関するアドバイスを行っているものです。年度初めにはオリエンテーションを実施し、特に1年生においては集団研修を実施し、高専生としての心構えを教育しております。

(2) 学生相談

学生何でも相談室(本校教職員と教員OB10名から構成)
学生生活上の様々な疑問や悩み、不安、その他の問題に関する相談に対応

- 相談時間帯: 月曜日から金曜日の放課後

(3) 進路指導

- 1) 進路指導の内容
 - (1) 進路アンケート調査、(2) 進路相談、(3) 企業説明会、(4) 進学説明会、(5) 応募書類、推薦書等の記入に関する指導、(6) 面接・筆記試験に関する指導など
 - 2) 求人および進学情報の収集
- 5年クラス担任、学科長、専攻長、専攻科長が担当

学生相談、進路指導ですが、学生相談は何でも相談室長をもとに月曜日から金曜日の放課後に学生の様々な悩みの相談に対応しております。進路指導については、5年クラス担任、学科長、専攻長、専攻科長が対応し、こういった進路指導の担当をしております。

(4) 健康支援・メンタルヘルス支援

- 1) 保健室
学生の健康診断、健康相談、救急処置等。
- 2) メンタルヘルス支援
学外の専門カウンセラーによるカウンセリングを週1回実施

(5) 経済的支援

- 1) 授業料免除制度
平成21年度の実績
全額免除許可者：延べ115名
半額免除許可者：延べ28名
- 2) 入学料免除制度
平成21年度：0名。
- 3) 各種奨学金
平成21年度：奨学金を受けた学生は327名(全学生の約30%)
独立行政法人日本学生支援機構の奨学金
地方公共団体の奨学金、民間育英団体等の奨学金

あと、健康支援・メンタルヘルス支援。これは、保健室ならびに学外の専門カウンセラーによるカウンセリングを実施しております。これは週1回行っております。あと、経済的支援ということで、授業料免除制度がございます。先程ちょっと申し上げましたけれども、平成21年度においてはまだ、就学支援というものがございませんでしたので、全学免除者延べ115名、半額免除者延べ28名となりました。その他各種奨学金約3割の学生が奨学金を受けております。

(6) 課外活動支援

- 1) 全教員による指導体制
体育系クラブ：23の部、5の同好会
文科系クラブ：11の部、9の同好会
(全学生のうち、約70%が所属)
全クラブ・同好会に全教員を指導教員として配置して支援
- 2) 「新たな地域連携型クラブ活動支援プログラム」
文部科学省の助成事業学生支援GPに採択
・地域に潜在する有能な人材をクラブ活動の学外指導者として登用
・地域住民参画型のクラブ活動の実施
- 3) クラブ活動の合宿支援
長期休暇中に、クラブ活動の合宿に学寮を利用

課外活動支援ですが、本校においては体育系クラブ、文化系クラブ。このようにございますが、約7割の学生がこういった課外活動、クラブに所属しております。ということで、これらクラブを全教員あるいは一部職員も入って支援をしています。さらに一昨年度ですね、新たな地域連携型クラブ活動支援プログラムということで、これは文部科学省の学生支援GPに採択されたものですが、どうしても

のかと申しますと、地域に潜在する有能な人材を課外活動の学外指導者として登用するという地域住民参画型のクラブ活動の実施となります。その他、長期休暇中に、学寮を合宿場として提供している、という風になっております。

(7) 留学生への支援

留学生委員会(国際交流・留学生担当校長特別補佐)

- ・定期的な留学生とのミーティング
- ・日本文化に関する勉強会
- ・町内外の国際交流会への参加
- ・ホームステイの手配
- ・日本語や日本語事情など語学・文化に関する教科の補講
- ・専門科目などの補講
- ・学生をチューターとして配置

あと留学生の支援ですけれども、留学生委員会がございまして、定期的な留学生とのミーティング、あるいは日本文化に関する勉強会、町内外の国際交流会への参加、ホームステイの手配、日本語や日本語事情など語学・文化に関する教科の補講、あと、専門科目などの補講、そして1人の学生に1人のチューターを配置するという風なことで支援をしております。

学生寮紹介

次に学生寮ですが、

志学寮外観



これが学生寮の外観でして、志学寮と呼んでおります。

志学寮内観

- ・ 前期は、1年生と2年生との同科二人部屋
- ・ 後期は、同年同科二人部屋



これが部屋ですが、基本的に前期は、1年生と2年生を同じ部屋にしまして、2年生が1年生を指導するというようになっております。後期は1年生も慣れたということで、同年同学科、原則2人の部屋になっております。

入寮者数(平成22年5月)

1年	2年	3年	4年	5年	専攻	計
209	120	90	78	38	3	538
(14)	(12)	(7)	(6)	(3)	(1)	(43)

()内数は女子学生

- ・ 定員 556 名
- ・ 入寮率= 538 / 556 = 96.8%

入寮者数は、これは今年度の5月現在ですが、538名。専攻科生も入っているんですけど、半数を超える51%の学生が入っております。556名の定員に対して538名、96.8%の入寮率となります。

寮生活の特徴(郷中教育の継承)

- ・ 集団生活による人間形成
- ・ 異学科・異年齢間意思疎通能力の育成
- ・ 自立・自律訓練

本校の寮生活の特徴は、郷中教育の継承と言えるのですが、集団生活による人間育成、そして異学科・異年齢間の意思疎通能力の育成、そして自分で立つ、自分を律する、自立・自律訓練がされる場という風に思っております。

寮生会組織

- ・ 寮長 副寮長(2名)
- ・ 寮生会役員
(風紀, 衛生・生活, 体育, 交通, 文化, 会計)
- ・ 棟長
- ・ 班長
- ・ チューター(試験前の勉強相談者・指導者)

あと、寮生会がしっかりしておりまして、寮長・副寮長以下こういった寮生会役員が寮生を指導的立場で指導しております。あとチューターといたしまして試験前に低学年生に勉強を教えるといったことをやっております。

チュートリアル教育

- ・ チュートリアル教育とは、本寄宿舎独特な教育システムで、上級生が1年生の学習個別指導を行うものである。



これがチュートリアル教育と言うことで、本校独特の教育制度ではないかなと思っております。こういう状況で上級生が下級生を指導しているということになっております。

学寮行事(抜粋)

- 04月 入寮式, オリエンテーション, 寮生総会, 班長研修, 避難訓練, 面接指導
- 05月 新入生歓迎マッチ
- 07月 七夕会
- 10月 部屋替え, 班長研修, 留学生会
- 12月 寮生講話

学寮の行事、主な行事がこういった行事であります。少し省かせていただきます。

寮生会による留学生パーティ

- ・現在学んでいる留学生は、ウガンダ、ベトナム(3年)、スリランカ、カンボジア(4年)、ベトナム、ラオス(5年) の6名
- ・過去の留学生の出身国は、フィリピン、中国、ペルー、イラン、ベトナム、カンボジア、スリランカ、ケニア 等々。



あと寮生会による留学生パーティということで、現在3年生に2名、4年生に2名、5年生に2名。6名在学しておりますけれども、このように、留学生パーティで留学生と寮生が交流をはかるといことをしております。

地域共同テクノセンター概要

次に、地域共同テクノセンター概要でございますが、

地域共同テクノセンターの目的

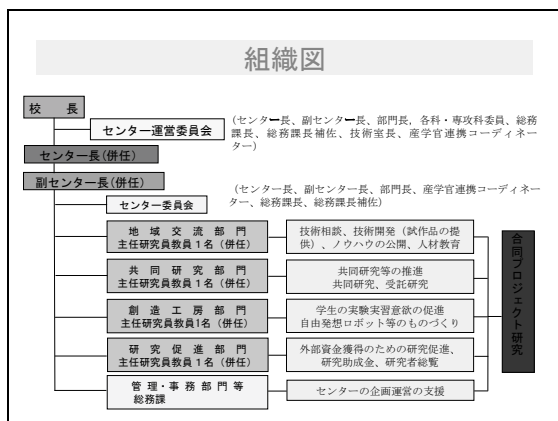
- ・地域の中小企業と連携し、共同研究や技術相談、技術者のリフレッシュ教育を行うための拠点施設
- ・本校がこれまでに蓄積した技術開発や研究成果を元に、共同研究、技術相談、技術者教育を集約的に行うことにより、地域の技術力を高め、地域産業の振興・活性化を助長し、地域の経済力の向上に貢献

地域共同テクノセンターは地域の中小企業と連携し、共同研究や技術相談、技術者のリフレッシュ教育を行うための拠点施設でございます。本校がこれまでに蓄積した技術開発や研究成果を元に、共同研究、技術相談、技術者教育を集約的に行うことにより、地域の技術力を高め、地域産業の振興・活性化を助長し、地域の経済力の向上に貢献しております。

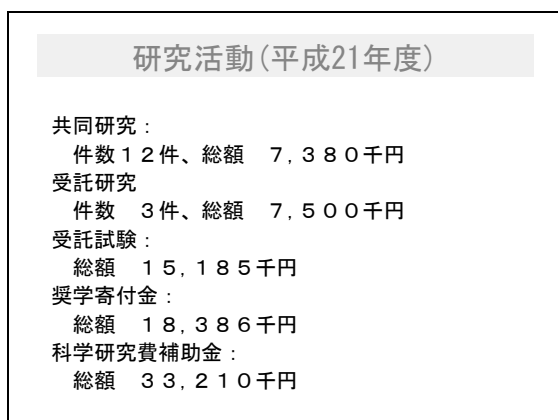
地域共同テクノセンター外観 (手前二階建が地域共同テクノセンター)



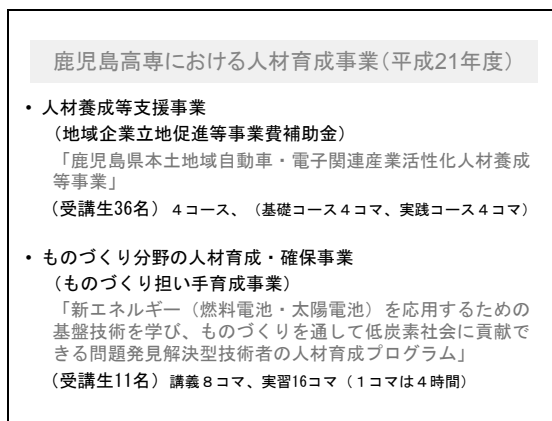
これはちょうどこの隣にあります、地域共同テクノセンターの外観になっております。



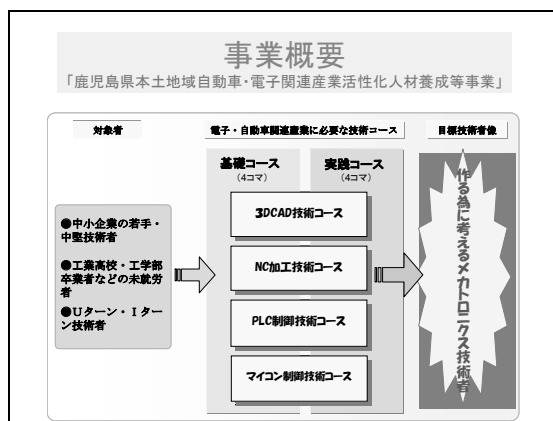
組織図ですが、校長のもとにセンター長、副センター長がおりまして、4つの部門、地域交流部門、共同研究部門、創造工房部門、研究促進部門がございまして、こういったことについて活動しております。管理・事務部門は総務課で担っております。



平成21年度の研究活動ですが、共同研究12件で総額738万。受託研究3件750万。受託試験1500万、奨学寄付金1800万、科学研究費補助金が3300万との資金を採択しております。



その他、平成21年度には人材育成事業ということで2つの人材育成事業を行いました。ひとつは、鹿児島県本土地域自動車・電子関連産業活性化人材養成事業でございまして、これは受講生36名おりました。もう一つはものづくり分野の人材育成・確保事業ですが具体的には、新エネルギー燃料電池・太陽電池、を応用するための基礎技術を学び、ものづくりを通して低炭素社会に貢献できる問題発見解決型技術者の人材育成プログラムということで11名の受講者がおりました。



これは先程の鹿児島県本土地域自動車・電子関連産業活性化人材養成等事業の概要でございまして、対象者としましては、中小企業の若手・中堅技術者、あるいは工業高校・工学部卒業者などの未就労者、あるいはUターン・Iターン技術者で、目標技術者像としましては、作る為に考えるメカトロニクス技術者と目標に立ててやっております。そのため

に基礎コース4コマ、実践コース4コマで実施をしました。

産学官連携

- ・ ソフトプラザかごしま「鹿児島高専産学官連携推進室」
- ・ 鹿児島市の情報関連産業を支援するとともに、中小企業の情報化を促進し、地域経済の活性化を図る




鹿児島高専IT関連技術シーズ発表会
会場：ソフトプラザかごしま展示室

あと、産学連携ということで、鹿児島市にソフトプラザかごしま、鹿児島高専産学官連携推進室を設けております。これは、IT関連技術シーズ発表会の模様でございます。

産学官連携

- ・ 産学官連携推進会議と全国高専テクノフォーラムへの出展
- ・ 高専の地域連携の紹介・PRの場



第8回 産学官連携推進会議での「高専機構的財産本部」食品関連技術の展示ブース
鹿児島高専は写真中央下の「きのこ(エリンギ)」の展示
会場：国立京都国際会館イベントホール

その他にも全国高専テクノフォーラムにも出展しまして、本校の活動状況をPRしております。これは、焼酎粕を廃培地としたきのこの栽培の様子です。

**産学官連携
錦江湾テクノパーククラブ(KTC)**

- ・ 平成10年3月、霧島市地区を中心とする南九州地域有志企業が、地域との連携強化を学校の理念の一つに掲げている鹿児島工業高等専門学校と相図って、産学官交流組織として設立
- ・ 現在41社の一般会員企業と、鹿児島県商工労働部、鹿児島県工業技術センター、かごしま産業支援センター、鹿児島県工業倶楽部、鹿児島市、霧島市等14の公的機関が特別会員として加入
- ・ 毎年4回会員と定期的な情報交換、技術交流、共同研究

これは、錦江湾テクノパーククラブというのも特徴のひとつでございます。平成10年3月に霧島市地区を中心として南九州地域有志企業が、地域との連携強化を学校の理念のひとつに掲げている本校と相図って、産学官交流組織として設立され、現在41社の一般会員企業と、14の公的機関が特別会員として加入していただいております。活動としましては、年4回の定期的な情報交換、技術交換、共同研究を行っております。

会員企業との共同研究(平成21年度)

1. 高負荷型立体格子状回転円板の性能評価に関する研究
2. 架橋発泡ポリエチレンフォーム製流動担体の処理機能解明
3. 新たな雇用創出を可能にする移動ロボットのネットワーク制御方式に関する研究
4. リーマ加工における加工面品位の向上に関する研究
5. シラスや火山灰等の桜島起因の火山噴出物の物性に関する研究
6. 予防安全技術「油中部分放電検出に関する研究」
7. 管群を直交する流れの蒸気流動特性及び再生器用伝熱管の沸騰特性の解析、水室部の圧力損失特性の解析
8. 資源回収型排水処理技術の開発
9. 自動車塗装廃液分離浄化システムの開発
10. 酸性廃水を対象とした嫌気性バッフルド反応器によるアルカリ剤削減運転方法の開発
11. 強制-自然共存対流の流動と伝熱
12. インテリジェント医療・生物・農業 検査センサデバイスと応用研究

これが平成21年度の会員企業との共同研究になりまして、12件ほどの共同研究を行っております。

南九州高専発新技術説明会

- ・南九州高専発新技術説明会
21年度第4回錦江湾テクノパーククラブ例会において、本校と錦江湾テクノパーククラブを主催、都城高専、霧島工業クラブ、JSTイノベーションサテライト宮崎を共催、鹿児島県工業技術センター、鹿児島工業倶楽部、霧島市、都城、南日本新聞社、宮崎日日新聞を後援として開催
(説明会出席者 89名)
- ・南九州発・新技術説明会
JST主催の本説明会に鹿児島大学、宮崎大学、鹿屋体育大学、都城高専、鹿児島高専が参加(会場：東京)

これは、南九州高専発ということで、本校及び都城高専を主催にですね、今年度は都城主催で行いました。さらに東京会場で、鹿児島大学、宮崎大学、鹿屋体育大学が参加をしております。

本校の特色

最後に、これは資料1に書いてありますので、簡単にいききたいと思います。

1. 創造性を育む教育が実践されている点

- 1) 「創造力豊かな開発型技術者」の育成：学習・教育目標の一つ PBL (Problem Based Learning) を取り入れた科目を配置
 - 機械工学科 1 年次 : 「創作活動」
 - 電気電子工学科 4 年次 : 「創造実習 I, II」
 - 電子制御工学科 3・4 年次 : 「創造設計 I, II」
 - 情報工学科 1 年次 : 「創造教室」
 - 5 年次 : 「システム設計学」
 - 土木工学科 5 年次 : 「意匠設計」
- 2) 「技術士会と連携した新たな実践的技術者教育」
 - 平成20年度・文部科学省教育GP事業プログラム採択
 - 平成20, 21年度、鹿児島県技術士会に所属する技術士と本校教員が連携して実践的な共同教育。

特徴のひとつとしては、創造性を育む教育が実践されている点ということで、PBL (Problem/Project Based Learning : 問題対応型学習法) を取り入れた科目を全学科に、創作活動とかこういった科目を配置しており、さらに平成21年度の文科省のGP事業プログラムとして採択された「技術士会と連携した新たな実践的な技術者教育」ということで取り組んでおります。

2. 学生寮を通じた全人教育を重視している点

- 1) 「本校の教育目的の達成に資する」ための「教育施設」
- 2) 準学士課程1年生に対して全寮制
- 3) 本校学生の半数を超える学生が入寮
- 4) 学生による自主管理体制が整備されており寮長を中心とした寮生会
 - 点呼等の生活管理及び下級生の日常生活相談や指導
- 5) 学校組織の寮務委員会や学生支援係の職員によるサポート。
- 6) 学習支援
 - 中間・定期試験前に、「学寮チュートリアル」を実施
 - 上級生が下級生の学習を指導
 - 平成21年度は延べ294名が参加

あと、学生寮を通じた全人教育を重視してい

る点、これは先程申し上げましたけれどもチュートリアル教育といったもの。

2. 課外活動を通じた全人教育を重視している点

- 1) 創造性を育む教育の一環として、各種コンテストへの応募を推奨
 - ① 平成22年度第23回全国高専ロボットコンテスト初優勝
 - ② 第3回3次元デジタル設計造形コンテスト昨年度に続き優勝
 - ③ 第7回全国高専デザインコンペティションの環境部門で優秀賞
 - ④ 第4回国際マイクロメカニズムコンテストでも3つの特別賞を獲得
- 2) スポーツ系の課外活動 (平成22年度全国高専体育大会)
 - ① ソフトテニス優勝
 - ② サッカー及びテニス準優勝

あるいは課外活動を通じた全人教育を重視している点、ロボコンは先程申し上げましたけれども、それ以外に第3回3次元デジタル設計造形コンテストで昨年度に続き優勝いたしました。それ以外にもこういったところで活躍をしています。

3. 7年間の効果的な技術者教育を行っている点

- 1) 平成12年度に準学士課程5年間の上に2年間の専攻科を設置し、7年間一貫の高度な技術者教育を実施している。
- 2) 準学士課程4・5年と専攻科2年を対象とした技術者教育プログラム「環境創造工学」は、国際認証を得ている技術者教育プログラムである日本技術者教育認定機構 (JABEE) の認定審査に平成15年度に合格して以来、同認定を維持している。
- 3) 専攻科を修了すれば大学学部卒業と同じ学士の学位を取得することができる。

あと、これは専攻科ですが、7年間の効果的な技術者教育を行っている点。

4. 地域貢献を実施している点

- 「地域との交流を推進し、教育研究成果を地域に還元。」
正規課程の学生以外に対する教育サービスに係る目的を掲げており、この目的を達成するため公開講座や出前講座等を計画的に実施。
- 1) 県内地域の中学生に対して一日体験入学を実施し、本校のPRに加えて本校の教育・研究成果を中学生に公開することにより地域交流や教育研究成果を地域に還元。
 - 2) 他の機関との共催や連携事業
 - 鹿児島県立科学館との共催事業
 - 鹿児島県の主催する中・高教員のためのパワーアップ研修
 - 地元の霧島市教育委員会との連携協定に基づく小・中学生のためのもの作り教室である霧島チャレンジャーおよび一般向けの市民講座的なニューライフカレッジ霧島
 - 霧島の小中学校の生徒を対象とした理科教育支援 (JST (科学技術振興機構) のサイエンス・パートナーシップの一環)

そして、地域貢献を実施している点、この中で先程触れませんでした。鹿児島市立科学館と協賛事業をしたり、鹿児島県に依頼され

て、中・高教員のためのパワーアップ研修を本校で実施したり、地元の霧島市の教育委員会とで小・中学生のためのもの作り教室を実施したり、あるいは、市民講座的なニューライフカレッジを開講しております。あと、離島の小中学校を対象とした理科教育支援を実施しております。

4. 地域貢献を実施している点

- 3) NPO法人「隼人錦江スポーツクラブ」は本校教員が中心になって設立したユニークな法人。本校は同法人に施設やグラウンドを開放したり人的支援を行ったりすることにより、地域のスポーツ振興にも貢献。

それと、これは本校独自のものですが、隼人錦江スポーツクラブというものを設立しまして、本校の施設やグラウンドを開放したり人的支援を行ったりしております。こういったスポーツを通じた地域貢献も行っております。

5. 産学連携を推進している点

平成9年3月、地域共同テクノセンターが設置され、地域中小企業を対象とした技術相談や共同研究等を行うなど産学連携を推進。

- 1) 平成10年3月、本校を中核とした産学官連携組織である錦江湾テクノパーククラブを設立。以来、会員企業での見学会、本校の技術シーズの説明会、講演会等を継続的に実施し、地域企業等との連携を高めている。
- 2) 平成15年4月、学生ベンチャービジネスプラン・コンテストで優秀賞を受賞した「ヤシの枝払いロボット」の実用化へ向け(株)トヨタ車体研究所と産学連携してロボットを試作し、改良に改良を重ね、処理スピードを約15分/本までに向上させることに成功。その後、平成17年5月18日、地域社会への貢献を目指して、ベンチャー企業「(有)隼人テクノ」を設立し、地域の環境保全に貢献。
- 3) 平成18～20年度、経済産業省の中小企業人材育成事業である農水工連携支援自動化機械システム分野の技術者養成事業を実施。年度毎に特色あるカリキュラムを編成し、関係教員と技術職員が指導にあたり、3年間合計でこれからの地場企業を担う若手技術者66名の受講者を無事修了させる。

あと、産学連携ですが、これは先程申し上げましたので省略させていただきます。

6. 国際交流を推進している点

学習教育目標の2番目に「グローバルに活躍する技術者」を掲げており、学生が異文化を体験・理解し、さらに英語によるコミュニケーション能力を高めるために、学年ごとに段階的な国際交流を推進していくことを目指している。

- 1) 平成17年度から、本科2年生10数名から30数名をカナダ・バンクーバー市のノートルダム・リージョナル・セカンダリースクールに送り海外語学研修を実施してきた。
- 2) 平成20、21年度には、バンクーバー市のBCIT（ブリティッシュ・コロンビア工科大学建設環境学部）に1ヶ月間専攻科生1、2名を派遣したが、平成22年4月にはこの実績に基づいて同校と国際学術交流協定を締結。
- 2) シンガポールのテマセク・ポリテクニクとは、平成21年度から本科3、4年生を対象にした双方向の学生交流を始めている。
- 3) 平成23年3月には、オーストラリア・パース市のセントストリート高等学校に、本科1年生を語学研修に派遣予定。
- 4) その他、国費外国人留学生の受け入れはもとより、カセサート大学（タイ国）、南京航空航天大学機電学院（中国）、釜山情報大学（韓国）と国際学術交流協定を締結し、学生及び教職員の相互交流、共同研究及び学術出版物などの交換を実施。

さらに、国際交流ですね。この中で3月にはオーストラリア・パース市に1年生を中心に語学研修に派遣予定でございます。

ご静聴有難うございました。

以上、最後の方ちょっと端折ってしまいましたけれども、学校概要を説明させていただきました。どうもありがとうございました。

【門委員長】 ありがとうございました。この後のことについては、栗田総務課長より説明があります。

【栗田総務課長】 では、私の方からこの後のことについてご説明させていただきます。

ただいま、学校概要についての説明が行われましたが、鹿児島高専に委員の先生方でも来られるのが初めての方もいらっしゃると思いますので、この後、施設見学を行いたいと思います。

施設見学終了後、10分ほど休憩を取りまして、予定ではございますが、15:10すぎ頃から議事を再開したいと思いますので、よろしくお願いいたします。

尚、本校の教職員におきましては、15時ま

でこの大会議室にお戻り下さい。それでは、視察される校長先生、それと3主事の先生方、事務職員、それと今からお連れいたします外部評価委員の先生方は申し訳ございませんが、1階の玄関前にお集まり下さい。

なお、手荷物につきましては、この部屋に置いていただければ施錠いたしますので、よろしく願いいたします。

(※施設見学)

再開

【門委員長】 それでは、外部評価委員会の議事を再開いたします。

今まで、説明されました事項につきまして、委員の方々からご質問、ご意見をいただきたいと思います。そのご意見、ご質問を受けまして、鹿児島高専の方から回答や意見を伺いたいと思います。委員一人当たり、4分程度で大変短いのですが、それぞれのお立場で関連事項をご質問いただきたいと思います、高専側の回答を4分程度、計8分を目処に進行していきたいと考えておりますのでよろしくお願いいたします。順番ですが、私は、最後に質問させていただきます。外部評価委員会規則第3条による委員順でお願いいたします。

それでは、時田委員からよろしくお願い致します。

時田委員からの意見と応答

【時田委員】 それでは、ただ今のご説明をいただきましたので、2、3質問をさせていただきます。あるいは情報提供というかたちで結構ですのでお願いいたします。今年3月の卒業生、全国的には大学生の就職率は数週間前で約3分の2くらいの内定率でありましたけれども、私も地元の企業の声と致しまして、こちら鹿児島高専さんの学生さんの採用が難しく、出来ないということで、できれば、

地元の県内の中小企業に採用できるような、そういう動きというものも、私達地元としては、欲しいなということで、このような観点から何かそのような動きがおりなのか一点お聞かせ願いたいと思います。というのは、県内の鹿児島の卒業生は、全国で県外に流出する割合というのが大体いつも全国ワースト1、あるいは常にワースト3の中に入っている。県外への流出県というかたちで、そういう汚名もいただいているわけでございますけれども、それで見れば、もう少し地元への定着というものも、お願いしたいなと思うところでございます。それから地域共同テクノセンターもありますけれども、やはり地元の企業との共同研究を進めていく中で、この鹿児島高専さんがお持ちの技術なりシーズなりをいかに地元の企業にもオープンにし、PRされているのか、このあたりがもう少し大きな形での動きが出来れば、県内の企業も共同研究的な動きももう少し出てくるのかなと感じたところでございます。以上です。

鹿児島高専の説明

【赤坂校長】 それでは、私の方からお答えします。あとからテクノセンター長に補足をお願いします。

地元企業への就職ということですが、高専の地元への就職率は20%を切っているくらいじゃないかと思います。年によって違うのですけれども、平均的にはその程度だと思います。その理由としては、地元の企業といわゆる大手企業の間でだいぶ待遇が違います。学生に勤めるとしてもそのギャップが相当大きいというのがひとつの障害になっているということですね。

ただ、鹿児島高専は技術者を養成しているわけで、学生が、企業のニーズや事業に高い関心を持てば可能性があるし、地元への定着

率も上がっていくのではないかと考えております。それで、今、インターンシップを全部の学科の4年生に開講しております。県内のどの企業がどういったことをやっているのか、どういった技術を持っているのかというような地元企業への知識も、インターンシップを通じて学生側に伝わっていくのではないかと考えております。

専攻科におきましては、1 カ月以上の長期インターンシップを推進しています。その際、事前に企業側とどういった研究をやるのかというマッチングを行いまして、学生側もそれならやってみたいであるとか、企業側もやる気のある学生が来るなら受け入れるということになる、そういったことを始めております。これにつきましては、学生がどこに宿泊するとか、企業までの交通手段をどうするかといった問題もあります。現実には、そのような幾つかの障害がありますが、専攻科の場合には、地元の企業の中でも技術を大事にしている企業だとか、おもしろい技術を持っている企業だからそういう企業でやってみたいという学生が出てくる可能性が結構あるのではないかと思います。

こういったインターンシップを通じて学生の地元企業への理解とか、地場企業の状況の把握とかいったあたりから始めていかないと、学校側から、学生に色々いっても、なかなか難しい状況と見ております。

それから共同研究のことですが、共同研究の件数は先程データでも出しましたが、それほど多くはありません。受託研究であるとか、技術相談も行っておりますけれども、それをもっと増やしていくことが可能かどうかということについては、テクノセンター長から補足していただきたいと思っております。ただいろいろな人材育成事業を通じて、かなり地域

の若手人材を受け入れ、学校に来て貰い、学校のいろんな実験設備を用いて人材育成はできているのではないかと考えております。芝先生から何か補足はありますでしょうか。

【芝テクノセンター長】 テクノセンター長の芝でございます。ちょっと補足的なご説明ということで、先程の共同研究、それから高専のシーズを広く広める手段、どういったことをやっているかということでもありますけれども、大きく広報という意味では本校にはK T C（錦江湾テクノパーククラブ）というのがございまして、その中でシーズの紹介というものを年に2回程やらせていただいております。大々的には第4回目ということでだいたい3月ぐらいにやらせていただいております。今年3月4日に、これは県産業支援センターさんと共同で、K T Cの例会ということで、シーズ発表を、もう来週になりますけれども3月4日にいたします。それからJST(科学技術振興機構)さんのほうと、年2回、これは鹿児島大学さん、それから鹿屋体育大学さん、先程教務主事の紹介にもありましたけれども、これはちょっと地元じゃないということなんですが、東京でやらせていただいております。それから、都城高専さんと本校のシーズ説明会というものも昨年からはJSTさんの後援というかたちでやらせていただいております。それからもう一点は、ソフトプラザでIT関係のシーズ発表会を。これはもう、4年間毎年夏頃にやらせていただいているということで、ソフトプラザのほうで2件程共同研究に結びついております。大体年間十数件、この3,4年は共同研究をやっておりますので、だいぶ昔に比べると増えたのではないかなと考えているところでございます。以上でございます。

【時田委員】 ありがとうございます。

【門委員長】 どうもありがとうございました。それでは、続きまして、宮村委員お願いいたします。

宮村委員からの意見と応答

【宮村委員】 錦江湾テクノパーククラブの会長をやらせていただいております、宮村です。鹿児島に高専の学生がなかなか就職出来ないというのは、企業側の方にも若干問題があるという風にも思っております。例えば給料の面とかそれから学生さん達が魅力を感じるような企業が少ないというのがあるのではないかと、大企業が少ないということもあるのですが、今、芝先生がおっしゃったようにいろんな形で接点を見つねながら、ベンチャーとして何かやっていければいいかなと思っております、その辺の仕掛けを色々考えて、産業支援センターなんかを考えていきたいなという風に思っております。

今度は私の質問なんです、私も高専の1期生で郷中教育という寮の全寮制というのは大変感動するんですね。私が高専生で寮に住んでいたこともありましたが、その当時から先輩後輩の関係で人間関係を築くという点で大変重要だと感じているのですが、その一方でメンタルヘルスという問題が少しでたんですけれども、こうゆう学生さん達がいらっしゃるのかな、と感じたわけです。もしいらっしゃるならば最近の学生さん達はどうかで悩んでらっしゃるのか、それでどんなことをやっておられるのかということを少しお聞かせいただければ有り難いなと思っております。

鹿児島高専の説明

【赤坂校長】 それでは、私の方で少しお答えさせていただきます。

宮村委員は本校の卒業生でトヨタ車体設計の社長であり、KTCの会長も務めていただ

ているわけですが、そのような方からの、もっとベンチャーに挑戦してはどうかというご意見は実感があります。本校の卒業生には、実際に企業のトップに立っていたりオーナーになっていたりする学生の比率が非常に高いのです。そういったこともありまして、今後もベンチャーに挑戦するような学生が出てくる、そういう環境を作ってやるということは大変素晴らしいことだと思います。

寮についてもお褒めをいただいたわけですが、まさにそういったことで、1年生に対して全寮制を取っています。集団生活の中で規則正しい生活をする、多少我慢しても集団の中で自分を律していくという、そういうことを特に入学後の早い時期に学生に身につけてもらいたいと思っております。本校は、そのあたりはかなり成功しているのではないかと思っております。ただ、寮の宿直はなかなか大変で、これは教員が交替でやっているわけです。大変であるけれども、寮は高専教育の基盤となるところなのでキチッとやっていく必要があると、多くの教員が思っております。

それから、メンタルヘルスの問題は本校でもございます。高専という学校種では発達障害者が多いというデータもあります。全国の高専のメンタルヘルスの研究集会や、高専を超えて、いろんな高等教育機関でも、こういった問題に対する研究や研修が行われております。本校におきましては、学生何でも相談室というのを設けておりまして、学生の相談に応じています。またカウンセラーが2名おり、交替で相談に応じています。それから看護師も日常的に対応しております。学生によっては、担任に相談したり、学生課に来たりしますので、そういったところでも対応しております。また、高専機構として、高専健康

相談室を設けて、電話による健康相談とかメンタル面の相談に対応しています。場合によっては、電話だけではなく直接面談もできるというもので、昨年設置されています。学生や教職員だけでなく、その家族も利用できます。

メンタルヘルスの実態とといいますか、本校にどのくらいそういった学生がいるのかということは学生相談室の松田先生より補足をお願いします。

【松田学生何でも相談室長】 その前に1点だけご確認させていただきたいことがあるのですが、宮村委員がご質問されたのは寮生活におけるメンタルヘルスの問題でしょうか、学校全般のメンタルヘルスの問題でしょうか。

【宮村委員】 全般でお願いします。

【松田学生何でも相談室長】 はい、現在相談室では窓口を開いて、相談を受け付けておりますけれども、件数自体は資料の基準の7の234頁に具体的な件数として出ておりますが、これは相談室だけではなくて、相談室員という先生方も何人かいらっしゃるのですが、そういったなかで直接相談室に来るのではなくて、研究室に相談に行く学生もいるものですから、それも含めると、ここ3年間の相談件数及び時間、大体的内容ごとに分類した表が載っております。やはり件数としても多いのは学生生活全般でこれは、もちろん寮生活も入りますし、部活動の問題ということもあります。広く人間関係、友人関係の問題ということもありまして、相談室で扱っている中でも、これは本当に深刻だな、というのは、この中で、年間でも1,2件ないし3,4件くらいですね。あと、これとは別に、先程校長からも話がありましたが、発達障害を持っている学生をどうサポートしていくとか、そういった学生に対してカウンセリングを定期的

に受けてもらうといったようなことを担任と連携して行っておりますし、問題なのはメンタル面で申しますと、どうしても鬱病とか精神的なトラブルによって休学をしてしまう学生がでてくるということはどこの高等教育機関でもあることなんです、なかなかこれは難しい問題で発達障害の問題もそうなんです、どのようにこれから支援していくかというのがありまして、今はその時その時で個別の対応を迫られているわけですが、学校としてはどのように全体的にサポートしていくかということは今検討中なところなんです。実態としてはその程度でございます。説明になりましたでしょうか。

【宮村委員】 これは、寮生の中にもそういった状況になる学生がおられるということでしょうか。

【松田学生何でも相談室長】 そうですね、相談に来る学生のケースとして寮生活になじめずに寮を出て、自宅から通うという学生もおりますし、それほど深刻な場合でないときは寮務主事のほうが適切に対応しまして、2人部屋の場合ですと、同じ部屋の学生とどうしてもそりが合わないというときは、部屋替えをしたりですね、そういった風に寮の方では対応しております。

【宮村委員】 高専に限らず、全国の大学でもそういうことがあるということでしょうか。

【松田学生何でも相談室長】 はい、極めて多いと思います。

【宮村委員】 企業側の立場として、そういう学生、つまり予備軍の方が会社に入られて、尚厳しい環境のなかで仕事をすると、本当にもすごく困るんですよね。今や企業の人の中で1割がメンタルヘルスを抱えていると社会問題にもなっていて、当社もそれからグループ会社もみんなですね、そういった

メンタルヘルスは本当に経営問題のひとつだ
と思うのですが、意見をお聞かせ願いたい
のですけれども、そういう学生もしくは社会に
出て行く社会人として、高専、教育機関で、
どういったことをやればそういうのが治って
いくのか、どういう処方があるのか、対処療
法ではなくて、根本的にどんどころなんだ
ということがあればお聞かせ願いたいと思
うのですけれども。

【松田学生何でも相談室長】 これはですね、
非常に難しい問題であります。例えばメン
タル面で仮に鬱病という代表的なものをあげ
させていただきますと、特に僕の親友なんかも
そうですけれども、企業に入って鬱病にな
って退社を余儀なくされた者もおります。ど
う予防していくかということは非常に難し
い問題で、まずは、一般論ですが、周りに
愚痴でも何でもいいからこぼせる相手
がいるかどうか、誰かにしゃべって、自
分の気持ちを聞いてもらえるような友人
でもいいですし、学校であれば教員でも
いいですし、先輩でもいいですし、そう
いう方がいない人は厳しくなります。そ
ういった意味では人間関係が広くもて
る人ほど、なりにくい、という統計が出
るわけではなんですけれども、逆に高
専で言えば優秀で、真面目な人ほど責
任感が強くなって、全部自分で解決し
ようとするので、ある一定を超えてし
まうとオーバーフローになってしま
って、そういうメンタル的なトラブル
を発症してしまうというケースが多い
と感じます。そういう意味では高等
教育機関は学校も含めて、そういう
メンタル面でトラブルを抱える学
生が非常に多くなっております。も
う一つ鬱病を発症する要因として、
先程出ましたが発達障害という問
題がありまして、発達障害いわゆる
ADHD やアスペルガー症候群とい
うものがありますけれども、あれは学

力や成績面での困難はともなわないとい
うケースがほとんどなんですけれども、
非常に多く在籍しております。大学ま
ではスムーズに、ちょっと変わった人
だなとみられて、成績面ではクリア
して大学には入ったのだけれども、
企業に入って、自分で考えて行動し
ていく中で、いっぱい、いっぱいにな
ってしまって、そこで、自分は出来
ないということで、それが2次的な
要因で、発達障害が原因で鬱病を
発症してしまうケースもあります。

ただ、これはちょっと中々、外から
見て見分けるといことは非常に難し
いという問題もありますので、なか
なか予防というところまではいか
ないのですが、まずは、学校でも
そうですし、企業でもそうですし、
広くこういった病が当たり前にあ
るんだということを知ってもらった
上で、学校では相談窓口を出来る
だけオープンにしておくようにす
るとか、企業でも、もちろんそう
いったことをされると思うのです
けれども、やっぱり周りがそう
いったことがあるという前提で
いろんな方に理解を示していく
というそういう意味での経営とい
うものがおそらく大事になって
くるんだろうと思います。十分
な答えになっていくかわからない
ですけれども以上になります。

【赤坂校長】 アスペルガー症候群とい
うものが大変多いということなん
ですね。特に高専の学生には比
率として高いと言われているの
ですけれども、これは、基本的
には治らないといわれています。
先天的な生物学的な問題であ
って治らないということで、
その辺は適応障害とはだいぶ違
うわけです。ただ、アスペル
ガーの人とどうやって付き合う
かについてはいろんな資料が
手に入るわけですから、そう
いったことをやっぱり知ってお
かなくてはならない。やりかた
によっては、その人をうまく
生かせるのではないかと思います。
た

ぶん企業もそのようなことを考えてやっていると
っているのではないかと思います。だんだん
よくなっていく障害もあるし、治らない障害
もあるし、いろんな障害がありますが、個別
に接し方を考えていかなければならない、障
害の状況によって、その人とのおつきあいの
仕方があるのではないかと思います。

【門委員長】 どうもありがとうございます
た。それでは次に濱田委員お願いいたします。

濱田委員の質問と応答

【濱田委員】 それでは、2点ご質問させて
いただきます。ひとつはですね、学生の授業
の中で地域の関わりという各交流カリキュ
ラムの中でそういうのがあるとは思いますが、
例えば霧島市に出かけて行ってなにかそ
こから学んで授業の中に生かすものがあるか
とか、そういう具体的なことがあれば、とい
うのは県内あちこちから学生達が集まってい
ると思うのですが、そういう学生達が地元と
の関わりを持つことで学ぶ・育つというこ
とがあったらいいと思うのと、そうしてい
て欲しいという期待を込めてお聞きします。

それと、あちこち見せていただきまして、
グラウンドなりテニスのコートであったり学
内の開放をどのくらいしているのか、また研
究設備の開放そのものは難しいとは思いま
すけれども、図書館であったり、学内にあ
るものを貸し出すような具体的なことがあ
れば、教えていただけたらと思います。以上
です。

鹿兒島高専の説明

【赤坂校長】 学生と地域との関わりは、ど
なたがよろしいでしょうか。

【前野都市環境デザイン工学科長】 都市環
境デザイン工学科の前野です。私どものほう
で、ものづくりの一環で、地域の自治体と一
緒になりまして公園の設計というのをやっ
ておりました。地域の地元住民の方に集まっ

いただきまして、情報を集約いたしまして、
ちょうど寮の裏の方に公園の設計を私ども
の方とその補佐の方といたしました。私ども
は公園の案の模型を作製しまして、その模
型をまた地元住民の方に見ていただきました。
実際模型ですので、特別な観点というか難
しいこともなく、ただ見るだけでどうい
ったものが出来るんだと直接分かります
ので、小さな子供でも大人でもそれを見
て批評できる、という風なかたちにしま
して、意見を出していただいて、それを参
考に設計し直しまして、実際寮の裏の方
にいろいろなものを参考にして公園を作
らせていただきました。その公園の特
徴的なことは、バスケットゴールがある
ところ。他の公園ではバスケットゴール
というのなかなか無いと思います。その
他の特徴的なところとしましては木の
実があります。10本か20本ほどあり
ます。あと、バスケットコート
の周りが高い観客席のように斜面にな
っておりまして、学生達がイベント
なんかをするときは斜面のところに皆
さん座っていただいて、そこが観客席
になるという風なところまでやりました。
まだ活用的には学校的に何かやっ
たという例はないんですけども、公園
を見ていると、地元の方々がよく利
用しているようです。新聞等でもとり
あげていただいております。

今は、稲荷山の方を計画しております。
稲荷山は、ちょうど元の城跡ですので、
その歴史的な観点等を学生と教育委員
会の方で勉強させていただいて、歴史
的なことを考えながら原型模型を今
年は作っておりまして、もう少しし
てから地元住民の方と共同で公園を
どういうものを作るかということを進
めていくところでございます。以上
です。

【赤坂校長】 本校の特色という資料の4番
目に、地域貢献を実施している点とい
うのが

ございます。中学生の1日体験入学であるとか、小中学生のものづくり教室であるとか、一般向けの市民講座であるとか、離島の小中学生を対象とした教育支援であるとか、そういったことをやっております。

先日は、学校の前から隼人駅までの道路を清掃しましょうということで、本校の学生の通学路になっている道路の清掃をやったのですが、そういったボランティア的な活動がもう少し出来たらいいのかなと思っております。

あと、もう一点の学校の開放ということですが、今のところにちょっと書いておりますけれども、隼人錦江スポーツクラブというNPO法人があり、本校の教員が理事長を務めております。その会員の生徒さんが本校のテニスコートを使いに来るとか、年配の会員が本校のグラウンドでゴルフの練習をしたり、グラウンドゴルフをしたりしています。そういうことをしながら、生徒に声かけをしていただいたり、トイレの掃除をしたり、そういったこともやっていただいています。本校は広いグラウンドをもっておりますので、一般の方にNPO法人を通じて開放しております。それから体育館もバスケットやバレーの練習に開放しています。

図書館に関しましては、まだ一般開放してないですかね？

【保坂図書館長】 しております。

【赤坂校長】 していますか、ではその説明をお願いします。

【保坂図書館長】 図書館長の保坂です。先程見ていただいた図書館ですけれども、本校の場合奥まったところがございますので、なかなか一般の方々に来ていただけないんですけれども、基本的には自由に来ていただいて利用してもいいかたちです。図書カードを作ってください、貸し出すことはできます。

これは、九州の他の地区の高専なんかは、入り口の近くに図書館があったりする場合には結構外から来ていただくんですけども、本校に関しましては、位置的な問題で、一番奥にあるため、なかなか利用していただく方は少ないのですけれども、たまに来ていただいて新聞を読んだりとか本を借りることももちろん可能です。うちの図書館は小さく見えるんですけども、ネットワーク上に繋いでリファレンスサービスというのは充実していると思います。ですので、今年度から県立図書館と連携があります。いわゆる県内の図書館からリファレンスを通じて本校にある蔵書を貸し出すというサービスも行う予定です。今年からなのでまだ実際どこまで有効に動くかというのははっきりわかりませんが、スタートしているという状況です。

【門委員長】 その開放というのは、平日だけでしょうか。それとも土日も開放しているのでしょうか。

【保坂図書館長】 日曜日は基本的に、試験前以外は閉館しています。土曜日は開館しております。

【門委員長】 どうもありがとうございました。

それでは石窪委員よろしくおねがいします。

石窪委員の質問と応答

【石窪委員】 説明をいただきまして施設なども大変充実しているなど実感しましたが、数点ほどお伺いします。

まずひとつは、学校説明会の件ですが、在籍者の出身地の比率を考えたときに、この鹿児島市会場と霧島市会場とで行われているということでございますけれども、どのようなかたちで県下から学生が来るのかということをお教えいただきたいと思います。それは今、地方の学校は統合が進んで、数が少なくなっ

ている状況の中で、より専門的な教育を受けたい場合、こちらは寮生活もあるので、意図的に鹿児島市よりも逆に市町村の方々に、より知っていただいて、このようなところで学ぶことが県にとってもですし、学生にとっても必要だと思いますし、大きな役割があるのかなと実感しております。そのあたりの現状ですとか、入学の説明会に関するアプローチをお伺いします。

次に、長期休暇の有効利用についてです。セメスター制を導入していると言うことで、もともと休みは、夏休みはどこも多いのでしょうけど、春は2月25日に終了したら1ヶ月程あるわけですが、そのこの部分に関して、一般の普通科の高校ですと、補習、補習で大学受験に向けていろいろとあるわけですが、空いている休みが結構ある中に、どのようにして、アプローチをなさって、有効に使うように指導しているのかなと、ちょっと気になるところでした。

あともう一点は、中だるみ対策についてです、本科で5年、専攻科まで行きますと7年ですので、受験がないという中で、中だるみしないで皆さん目的意識もあって就職率も大変高いので、よいモチベーションを持っているかと思うのですが、そういったところの工夫についても新しい取組とかあれば教えていただきたいと思います。以上です。

鹿児島高専の説明

【赤坂校長】 学校説明会なのですが、今年度は鹿児島、霧島地区で新しく開催したということ为先程教務主事に説明してもらいました。

それ以外の地域や、いろんなかたちでの入試の案内であるとか、情報提供であるとか、これは教務主事からの説明がよろしいですね。

3番目にお話がありました、本科5年+専

攻科2年の中だるみについての対策と言うことについても教務主事に説明をお願いします。

【植村教務主事】 まず、本校は全県下から学生が来ているわけですが、在学生の占める割合というのは、鹿児島市地区、霧島市地区、そして鹿屋地区そして川内地区の順でだいたい在籍数を占めております。霧島市と鹿児島市については、鹿児島市のほうが少し多いのですが、ほとんど鹿児島県全県下から通っております。先程中学生と保護者の説明会を今年度初めてやったと申しあげたのですが、予想を上回って、来ていただきました。今後、鹿屋地区とか、川内地区であるとか、そういう方向に広めていきたいというふうに考えております。それと、学校の先生方で手分けしまして、全中学校を個別訪問をしております。ですから鹿児島地区、霧島地区はもちろんですが、大隅の佐多とか、あるいは枕崎とか小規模校等にも全県下ほとんど、今年度は190校近く個別訪問いたしまして、そして本校のPRということに務めてまいりました。本校は寮がございますので、遠い地区からでも来てくれる制度という状況であります。

それと、春休みが長いということなんですが、実は明日、今年度の終業式なんです。そのあと学生は春休みに入るわけですが、終業式の中でせつかくの長い休みを有効に利用するようなことで話をしようとは思っているわけですが、本当に好きなことをやろうと思えば時間はたっぷりあるわけですから、あとは本人達がモチベーションをどうやって維持して、向学心を向上させる取組をしてくれるかということが、ちょっと難しい問題のところでもあるのですが、来年度からはですね、夏休みの場合は本校では、8月の10日から9月の末まで、今年度は夏休みだったんで

すけれども、そこをちょっと改めまして、本校の場合は年間 30 週を主体として授業をしております。前期 15 週、後期 15 週ですね。それで、夏休みに入る前に試験が終わってま
すので、15 週目の授業を 9 月の最終日に持
てきまして、ここで答案返却、試験問題の解
説、そして前期の授業に対する学生の反省、
そしてどこが理解出来ているか、出来ていな
いかという反省をするということで、基礎学
力の定着を図る週として来年度から取り組も
うと思っております。

従来は、9 月いっぱい
の休みでしたけれども
も 1 週間くらい早め
まして、基礎学力定着
の時間、あるいは、振
り返りの時間を取り組
むように考えておりま
す。

あと、中だるみの問題
ですけれども、これも
以前ご指摘いただいた
件なんですけど、やは
り 3 年生がこの中だ
るみの学生の割合が多
くて、方向転換だとか
そういった学生が多
くなっているのも事
実であります。いず
れも欠席が多いとい
うのが問題だったん
ですけれども、現在
は出席日数の 15 週
で 1 単位でしたら、
5 分の 1 を超えて休
みますと、その科目
は未履修ということで
、修得しなかったとい
うことになります。
出席条項を厳しくし
ました。そのお陰で
以前 4% 近い進級
できなかつた学生が
いたのですが、それ
が 2.8% まで改善
されております。ひ
とつの授業に出席さ
せるという効果はあ
ったのかなと思っ
ています。

キャリア教育というの
が、近年特に言われ
ておまして、これは
従来取り組んでいな
かったことは無いわ
けですけれども、本
年から低学年から
キャリア教育に力を入
れていて、やっぱり
高専に入ったばかり
の 1 年生については
希望を持って入っ
ているのでしょう
けど、希望を見失
ったりとか、中だ
るみ現象の原因
になっております。
技術者として学生
はどう

やって学び、どう
いった知識を身に
付けないといけ
ないかというこ
ろを今後重点
的に、低学年
から指導を
やっていき
たいと思っ
てお
りま
す。
以上
です。

【西留校長特別補佐】 ち
ょっと補足説明を
させてください。
先程の学校説明
会のことで
すけれども、霧
島市、鹿児島
市よりもむし
ろ地方でや
ったほう
がいいの
ではないか
という
ご指摘
ですが、
教務主
事と一
緒に話
し合
い
を
し
て、
鹿
児
島
市
と
霧
島
市
に
決
め
た
の
で
す
が、
それ
は
で
す
ね、
21
年
度
の
入
学
者、
それ
から
22
年
度
の
入
学
者
が
10%
減
っ
た
と
い
う
こ
と
で、
校
長
か
ら
も「
な
ん
と
か
な
ら
な
い
か
」
と
い
う
話
も
い
た
だ
き
ま
し
て、
調
査
し
ま
し
た
と
こ
ろ。
霧
島
市
は
20%
減
っ
て
い
ま
し
た。
それ
から
鹿
児
島
市
地
区
は
10%
減
っ
て
い
ま
し
た
の
で、
地
方
の
受
験
者
数
と
い
う
の
は
変
わ
っ
て
い
な
か
つ
た
ん
で
す
ね。
そこ
で、
あ
わ
て
て
保
護
者
説
明
会
を
し
た
ほう
が
い
い
の
で
は
な
い
か、
と
い
う
こ
と
で、
本
校
で
行
い
ま
し
た
ら、
50
名
く
れ
ば
い
い
の
で
は
な
い
か
な、
と
思
っ
て
い
た
と
こ
ろ
100
名
来
ま
し
て、
鹿
児
島
市
地
区
も
100
名
く
る
か
な
と
思
っ
た
と
こ
ろ
が
150
名
来
ま
し
て、
結
果
的
に
受
験
者
数
が
100
名
近
く
増
え
ま
し
て、
推
薦
者
も
か
な
り
増
え
ま
し
た。
と
い
う
こ
と
で、
成
功
し
た
の
で
す
が、
来
年
以
降
ど
う
な
る
か
分
か
り
ま
せ
ん
が、
そ
う
い
っ
た
こ
と
で、
霧
島
市
地
区
と
鹿
児
島
地
区
で
PR
さ
せ
て
い
た
だ
い
た
と
い
う
こ
と
で
ご
ざ
い
ま
す。

【南金山寮務主事】 これ
は回答
ではなく
て、補
足的な
こと
です
けれ
ども、
本校
の寮は
教育寮
という
視点
で入寮
して
もら
って
いま
す。従
いま
して、
先程
離島
等の
学生
が、寮
があ
るの
で安
心し
て入
れる
とい
う風
にお
っし
やい
まし
たけ
れど
も、
残念
なが
ら福
利厚
生の
為の
寮で
はご
ざい
ませ
ん。1
年間
寮に
入っ
てい
ただ
き
まし
て、
その
1年
間の
なか
の生
活状
況を
見て
違反
があ
れば、
たと
え離
島で
あろ
うと
も寮
か

らは退寮していただきます。これは、2年生以上もすべて対象になりますので、資料にもありますように基本的には4年生を中心にした寮生会という役員学生が運営していきます。その中で、違反者がでないように、指導していきます。その中で、将来社会に出たときやっつけられるという規則正しい生活が出来ることを身に付けた者だけを翌年残すというかたちになっておりますので、よろしく願います。

【赤坂校長】 ちょっと補足しますと、寮は現在550人くらいの定員ですけれども、それでも不足しているという状況で、今寮務主事が説明したように、大変厳しいチェックをしており、遠方だから優先的に入れるという状況になってないわけですね。100名程度の寮を増築することがほぼ決まっておりますので、そうすると少し事情が変わってくるかなと思います。

それから、学校説明会は会場を決めて中学生や保護者に来てもらうというやりかたのほか、中学校を回っています。回っているのは170校くらいで、鹿児島県内の中学校の過半数は回っていることになります。

夏休みの有効利用についてですが、夏休みには全国高専の体育大会があります。7月中頃から九州沖縄地区大会があって、地区大会の上位者が全国大会に出場します。全国大会では、様々な種目の大会が8月中頃からずっとあるわけですが、学生はそのための練習をやったりとか、合宿をやったりとかしています。寮生が帰省するものですから、体育会系クラブの学生は寮で合宿をしながら練習をするとか、そういうことをやっております。

それと、夏休みに、寮を使って補習をやったりとか、ゼミをやったりとか、そういうことをやっている先生もおられるようです。

それと、9月になりますと、全部の学生ではありませんが、カナダのバンクーバーの高校に語学研修に行ったりとか、シンガポールのポリテクニクとの学生交流に参加したりとか、幾つかの海外研修を行っています。海外研修にはある程度まとまった期間が必要になるので、9月の休暇中を使っているんですね。

それから、中だるみ対策が目的ということではないのですが、3年生の一月に毎年学習到達度試験というのをやっています。高専機構が全部の高専を対象にやっているんですね。数学と物理の2科目だけですけれども、一斉の試験で、鹿児島高専は、数学は全国の高専の中で何番目、物理は何番目というように順位も出てくるものですから、みんなで頑張ろうということで、勉強させています。こういったことがひとつの目標になり、中だるみの緩和にもなっているのではないかと思っております。

【門委員長】 ありがとうございます。よろしいでしょうか。

それでは、相良委員お願いいたします。

相良委員の質問と応答

【相良委員】 今、聞いている中で質問が段々無くなってきて。実はですね、私が1期生として最初に入ったときは、123名入学して、103名卒業したんですが、ちょっと今5年生で卒業と言うことで途中から編入、転入とかいろいろございますので、何とも言えませんが、1年生で入った学生は5年後に何名くらい、落第とか留年とか色々あるでしょうから、先程の2.8%程になったよ、という話の5倍ということでしょうか。10%の人がやっぱりズレていくということでしょうか。どうでしょうか。具体的にはやはり分かりにくいですかね。

【赤坂校長】 ちょっと、今数字がないのですが、約90%ですかね。

【相良委員】 というのは、今聞いてきた中で学校で学習時間をたくさん設けたり、いろいろしてるから、出てこないのもどうだこうだ、ということも聞きましたので、私の頃からするとずいぶん色々な政策をもって、やっているというのがわかりました。

【赤坂校長】 わかりました。それは、報告書の中でちゃんとしたデータを後で提示しておきます。すみません、206 頁に載っております。

【植村教務主事】 206 頁の 6-1-②-8 の表なんですけれども、一番左側が5年次年度ですね。それで、2009 年度1年次入学者数、5年次ストレート在学者数、ストレート在学率ということで、一番右側を見ていただきますと、学校全体としてストレート在学率が86.4%このなかには、推薦入学で入ったものが94%、学力入学で入ったものが84%、統計で86.4%ということです。2007 年が77%、2008 年が78%、2009 年が86%ですので、年々上がってきているということになっています。

【相良委員】 ありがとうございます。それから、もう一点ですね、これは前も私質問したんですが、要は鹿児島らしい、鹿児島高専として相応しい何か特別な何か特色がないのでしょうか。例えばですね鹿児島にはロケット基地がふたつある、だからロケット工学というのを特別にやるとかですね、例えばアルバックがあるから真空技術をやるとか、ソニーがあるからソニーの技術をやるとか、京セラがあるから京セラの特殊な技術を何か勉強するというのも取り組んだらどうでしょうかね、という話をしたのですが、現実には難しくてなかなか出来ないかもしれませんが、いかがでしょうか。

【赤坂校長】 ひとつは、都市環境デザイン工学科の教員の焼酎粕の利用に関する研究があります。これは焼酎粕をきのこの培地に使って、その廃培地を家畜の飼料に使うという研究です。これは実用性が高い研究で、環境省などから研究費をもらってやっています。特許もかなりでています。そのうち、数件は既に登録されていると思います。

それからシラスの利用に関する研究があります。これも都市環境デザイン工学科の教員の研究です。都市環境は地元で立脚しているという特色があるんでしょうけれども、都市環境デザイン工学科の教員は地域的な特色のある研究をしている方が多いのかなと思います。

それ以外の学科の例はあげませんでしたが、いや、いや他にもあるんだという方がいたら、是非おっしゃってください。

【岡林学生主事】 私は、専攻科長をやっているときに技術士会と締結して、そこから学ぶということを今オムニバスでやっているのですが、大学は知識を深めるところだと位置づけられると思いますが、我が校は知識を使いこなすというスタンスでずっと PBL 教育（課題解決型教育）をやっているわけなんですけれども、専攻科の科目の中に環境創造工学プロジェクトというのがあります。これは、3専攻横断するというものを要求されたので起こした科目なんですけど、ものづくりを主体にし、本年度のテーマは新聞紙を利用して実物の椅子を作るというテーマで取りかかって、だいぶ遅くまでかかって、仕上げたのですが、そのようなものづくりに関係するようなテーマを学生は非常に喜んで一生懸命やりますね。ですから、そういう意味では先程の中だるみの話から、やはりものづくりを介して何かを

勉強していく PBL 関係を勉強していく、ちょうどそれは我が校のスタンスにぴったりだと思います。以上です。

【相良委員】 もう一点だけ。今年の募集に 100 人増えたということでしたが、昨年ロボコン優勝の影響が少しは影響しているでしょうか。いかがでしょうか。

【赤坂校長】 色々な広報活動をやっているの、ロボコン優勝の効果だけを検証するのはなかなか難しいのですが、多分、効果は非常に大きいと思います。

ここ数年、受験倍率が、1.9 倍、1.8 倍、1.6 倍と段々低下してきていましたが、今回は 2.0 倍に上昇し、受験者数が 100 名近く増えたんですね。

倍率について少し補足しますと、本校は単願制をとっています。単願制の意味ですが、公立高校と併願するのはかまわないのですが、公立高校の試験の日に手続きをしないといけない関係で、その日までには、本校にするのか、それとも公立高校を受験するのかを決めなければなりません。そういう意味で単願といっているわけです。実際は、合格発表後の辞退者はほとんどいません。

単願制で 1.6 倍というのはそんなに低くないのではないかと思います。ただ、だんだん受験者が減ってくると心配になります。それでさっき申しましたように、鹿児島市の説明会とか、学習塾への働きかけとか、そういうことも新たにやっています。それらの広報活動と共にロボコンの優勝もあるので、何がどう風に関係して、受験倍率にどう影響したかということにはわかりませんが、ロボコンの優勝というのがものすごくタイミングがよかったんですね。中学生が受験校を最終的に決定する頃で、非常にインパクトが大きかったのではないかと思います。

いろいろな報道機関に取り上げていただき、その効果は大きかったのではないかと思います。

九州内に高専は 9 校あるんですけども、全部の学科で志願者が増えたのは、鹿児島高専だけです。増えた学校は他にもありますが、100 名近く増えた学校は他にはありません。高専ロボコンの知名度は高く、高専は知らなくてもロボコンは知っているという人もいらっしゃるくらいですから、そういった意味では学生に感謝しなくてはならないと思っています。明日の終業式では、それを学生に言おうと思っています。

【相良委員】 ありがとうございます

【門委員長】 以上でよろしいでしょうか。

それでは最後に私からお伺いしたいと思います。

門委員長質問と応答

【門委員長】 私は、高専さんの文武両道の教育方針とか姿勢とか、あるいは卒業した人の受入とか、そういうものもつぶさによく存じ上げていますので、高専さんの卒業生や教育方針の素晴らしい面が多々目に付いています。あえて言わせていただきますと、非常に形式的と言えれば形式的なのですが、準学士課程の学習教育目標について、特に細かく見せていただきました。学習教育目標の 4-A というのは技術者の社会的な責任を理解することが出来るということになっています。「社会的な責任」という観点で教育をするプログラムの科目の流れを見ていきますと、実習とか実験とか本科の科目が並んでいます。しかし、シラバスをいくつか挙げておられる中に、そのような用語が一切でておらず、ひたすら専門の学習、という徹底した書き方をされています。これはシラバスの書き方というか、設定の仕方がちょっと合っていないと思われま。教育目標として、ここは重要なポイント

のひとつになると思います。「相手の立場に立ってものを考えられる技術者」という項目の「社会的な責任を理解する」というところですので、たぶん講義や実験などで担当の先生方がそういう話をされているのだろうとは思いますが、シラバスに一切そういうことが書いていないということは少し問題だろうと思います。手直しをしていただいたほうがよろしいのではないかと思います。

それから、もうひとつ気になっているのは、教務委員会というのがありまして、PDCA サイクルのプランのところですか。プランが非常に重要な役割を演じているということなのですが、一般教育の担当と専門教育の担当のリンクが、必要に応じて行うということで実施しているようで、具体的には、改組とかカリキュラムの抜本的な見直しの時には一緒にやるのだけれども、それ以外は関係ないというような書き方になっている。学生への教育の視点で見ると、一般教育も専門教育もガチッとスクラムを組むような教員の体制がこれから重要になってくると思われまますので、工夫をしていただく必要があるのではないかと思います。実は、鹿児島大学も同じような問題を抱えておりまして、なんとか工夫して改善していきたいとは思っているのですが、この中を見ますとかなり明確に切り分けている感じがします。私も工学部ですので、センスとしてはすごく分かるのですが、そういうことだけでは学生が十分な技量を身につけられないのではないかと、専門だけしか出来なくなってしまうのではないかと懸念されます。実践的な人間的能力について、鹿児島高専は、地域とも積極的にやっておられるので、鹿児島大学ほど心配は無いと思うのですが、社会に出たときにそういうコミュニケーション能力とか、一般教育の役割と言うことをもっと明確

にして、専門教育のなかに上手く位置付けていくと、さらに素晴らしくなると感じております。私の個人的な意見ですけれども、お考えがありましたらお願いします。

鹿児島高専の説明

【赤坂校長】 具体的なご指摘をいただいたわけですが、学習教育目標の、相手の立場に立って物事を考える技術者、技術者の社会的な責任を理解するということが具体的にシラバスに書かれていないんじゃないかというご指摘です。この点は、シラバスを確認した上で、不足のところをシラバスにきちんと記載したいと思います。技術者の社会的責任ということでは、技術者倫理、知財教育とも関係してくるのではないかと思います。

また、キャリア教育とか職業教育をどうするかという点とも関係があると思います。高専は就職が非常によく、キャリア教育とか職業教育はよくやれているほうだと言われているんですけど、実際はまだまだだというのが、高専関係者の意見です。高専機構としても、知財教育、キャリア教育、職業教育などをもっと充実させていこう、高専機構として何らかのモデルを作りましょうという動きも出ていまして、本校としてもそういったことに取り組んで、シラバスにもキチッと分かるように位置づけていきたいと思います。ご指摘の点はしっかりと確認しまして、対応していきたいと思います。

それから、一般科目と専門科目のリンクといますか、スクラム関係というご指摘があったんですけど、大学に比べれば高専はそういうことがやりやすい環境にあります。5年間一貫でやっておりますので、カリキュラムにも1年生から専門的なことも入ってまして、高学年になっても一般科目がはいっています。いわゆるくさび形のカリキュラムに

なっています。その中でどのくらい一般科目と専門科目の教員の話し合いが行われているのか、どの程度共同でカリキュラムを作られているのかということ、まだまだ不足していると思います。

高専間の教員交流制度という制度がありまして、この制度を利用して、東京高専から鹿児島高専に1年間在籍していた数学の先生に、鹿児島高専は東京高専に比べると数学のグループの中での話し合いとか専門との話し合いの機会が少ないのではないのでしょうかという指摘を受けたこともありました。

教員間の話し合いがやりやすい学校であり、基礎的な数学や理科と専門との関係もありますので、ご指摘いただいたところをこれからもっと推進していく必要があると思っております。

【門委員長】 ありがとうございます。よろしくおねがいします。シラバスは127頁などに4-Aと書いてあるのですが、そういう記述がないということで、今後ご検討お願いいたします。

いちおう予定の意見の交換が終わりましたが、委員の方で特に追加したい点はありませんでしょうか。

高専さんのほうでアピールしておきたいという点は何かありませんでしょうか。

よろしいでしょうか。

【松田何でも相談室長】 私、本日、一般教育科文系科長の代理でもありまして、そちらのほうからも申し上げます。

本年度から5年生に対して、技術者倫理の授業が始まっておりまして、社会科の教員、法律学の専門であったり、社会学の専門であったり、倫理学の専門家、または外部からの技術士の方、3名を講師として招いて、必修科目ではないのですけれども、本年度は全学

生が受講しております。学生からも非常に好評だったということは、聞いております。今年度から5年生から技術者倫理という教育は、一般教育の社会科が中心となって行っているということも補足させていただきます。

【門委員長】 皆様から、提言と回答が得られましたので、時間が非常におしているのですが、外部評価会員の打合せが16:10からということになっているので、25分ほど時間が遅れております。17:20までが打合せの時間ということでもよろしいですね。

【栗田総務課長】 はい。

【赤坂校長】 もともと70分で予定してありますので、皆様のご都合があるとは思いますが、もう少し時間が必要な場合は皆様でご議事されて結構です。

【門委員長】 今日配布していただいた資料に、評価報告書がついておりますので、それぞれの委員の方は、先程の発言も含めて、時間が制約されておりましたので言えなかったこともここに記入していただいて、それを束ねて、お渡しするというにしたいと思っております。全体的な整理の方は高専さんの方でやっていただくという手順でよろしいですね。

【赤坂校長】 はい、お任せいたします。

【門委員長】 17:20の予定ですけれども、まだ45分ほど時間があります。以上のような手順でよろしいですか。

【他委員】 はい。

【門委員長】 どうもありがとうございました。

【総務課長】 委員長どうもありがとうございました。時間を短縮していただきまして、予定どおり外部評価委員打合せを17:20終了予定とさせていただきます。

再開

外部評価報告書について

【門委員長】 外部評価委員の方でいろいろ

話をさせていただきました。かなりいい話がいくつかいただきました。今回の手順につきましては、先程のように内容の概要を私の方で取りまとめます。委員の方々のご意見等は、時間が短くてなかなか言いたりなかったところもありますので、報告書に書いていただいた上で、3月14日月曜日必着というようにお願いいたします。

できれば、電子ファイルのフォーマットで、先程の報告書のフォーマットを送っていただければ、それに書き込んでいきたいと思えます。電子ファイルで送っていただくということは、大丈夫ですね。

【赤坂校長】 それは、構いません。

【門委員長】 報告書を3月14日までに提出させていただいたうえで、高専さんの方で取りまとめていただきます。その内容については、一応は委員長の方でチェックさせていただくということでもよろしいでしょうか。それとも皆さんにそれぞれお送りして、チェックしていただくということも可能なのでしょうか。それは、いかがでしょうか。

一応全部仕上げたものでしたら、あまりメールで添付して送るようなものではなくなりますね。印刷をしていただくのがいいですかね。私の方でだいたいをチェックさせていただくということも可能ですが、よろしいでしょうか。

【赤坂校長】 そうなると、各委員の方に1枚フォーマットをお送りしますので、それに3月14日までに書いていただいて、それを学校で取りまとめをいたしまして、門委員に提出をしまして、そこで整理をしていただいたものを、また学校に提出していただくというかたちはいかがでしょうか。

【門委員長】 あるいは、やりとりをするのに、こちらの高専さんのどこかにでもアドレ

スを設定していただいて、ログインをして取り出すようなかたちにしていただくと他の委員の方も入れることとなります。皆さんにアドレスのIDとパスワードだけ送っていただいて、そこでやり取りをする方法も、秘密保持の観点からよろしいかと思えます。そのようにして仕上げていく方法も採れるのですが、いかがでしょうか。

【赤坂校長】 それでよいと思えます。

【堂込システムセンター長】 企画係と相談して、準備してまいります。

【門委員長】 わかりました。それでは、そういう方向で、とにかく3月14日までは提出していただくということで、よろしく願います。

本日の予定はすべて終わったということになります。

委員長としては、非常に手際よく進められたということもなかったのですが、皆様の御協力とバックアップがありまして、なんとか予定の時間を少し回ったくらいで終われそうですので、どうもありがとうございました。

それでは、これでお返しをしますのでもよろしく願います。

閉会のあいさつ

【栗田総務課長】 委員の皆様におかれましては長時間、誠にありがとうございました。最後に赤坂校長がお礼のあいさつを申し上げます。

【赤坂校長】 本日は、どうもありがとうございました。先程の質疑の中で委員の方々からご意見、ご指摘をいただきました。その後の外部評価委員の打合せでもまた、いろんなご意見がでたようですし、それをちゃんと取りまとめていただけるということですので、それについては本校の方でもいただいた課題にどう対応するかというアクションプランを

外部評価の報告書のなかでまとめさせていただきたいと思います。次は3年後ということになりますので、3年後の外部評価委員会の前に対応プランとかアクションプラン等がどれくらい実現できたのかということをもとめ、次回の外部評価のときにご報告させていただきたいと思います。

皆様には外部評価委員会を通じて、鹿児島高専の状況を把握していただき、ご理解をいただいております。今後とも鹿児島高専をどうぞよろしくお願ひします。

どうもありがとうございました。

【栗田総務課長】 これをもちまして、本日の会議をすべて終了させていただきます。

本日は誠にありがとうございました。

8. 外部評価委員からの提言に対する回答及び今後の対応等

	外部評価委員からの提言及び評価指摘事項	提言及び指摘事項に対する回答及び今後の対応（平成23年5月時点）	提言及び指摘事項に対する回答及び今後の対応（平成25年5月時点）	担当委員会
基準1				
高等専門学校 の目的	① ・21世紀になって我が国の産業経済構造が激変しグローバル化が進展する中で、アジアで活躍できる人材育成目標を明確に立てるべきである。単に語学力だけでなく、自分の考えを主張し、プレゼン能力を高めることや提案する力、創造する力を養う点に力点をおくべきである。（時田委員）	プレゼンテーション能力を高める力については、本科の卒業研究、専攻科の特別研究、インターンシップの報告等を通じて、引き続き、育成していきたい。また、創造する力については、PBL科目の内容等を充実させて対応していくことにしたい。		教務委員会・ 専攻科委員会
	② ・高専教育の目的について、高専機構の問題かもしれませんが、見直す時期ではないかと考えます。（宮村委員）	高専教育の目的はそれまでの中堅技術者の育成から創造的開発型技術者の育成へと転換を図っている。その現れとして、高専機構においてもコアカリキュラムの策定など、高専全体の教育の質を高める改革を目指しており、時代の変革に応じて高専教育の目的はステップアップしていると考えられる。		教務委員会
	③ ・時代と地域に根ざした学校の理念をより明確に打ち出すべきではないか。創立50周年を2年後に控える今、少子高齢化や低成長といった国内を取り巻く社会情勢と無縁な組織体は考えにくい。産業界からの技術者養成という要望をもとに設立された国立高等専門学校の一つではあるが、環境に最もフォーカスを当てて、その要素を盛った学科編成やカリキュラムに対するニーズは今後ますます高まると思われる。（濱田委員）	本校の教育理念および学習・教育目標について、卒業生や産業界からのアンケート調査等を行い、社会のニーズに応じた適切な理念・目標が設定されているかについて、今後、検討したい。また、学科編成やカリキュラムの改訂についても、社会情勢や産業界からの要望、教育の状況を踏まえて検討していく予定である。		教務委員会・ 専攻科委員会
基準2				
教育組織 (実施体制)	① ・基準2において、本科の各学科内における委員会活動が不明である。（門委員長）	本科には、教務委員会、学生委員会、寮務委員会を中心として多くの委員会が設置され、それぞれに各学科の代表が委員として選出されて審議などに加わっている。その委員会の議事要旨はオフィスの文書管理等に保存され、いつでも閲覧できるので、活動内容はあきらかにされている。		教務委員会・ 学生委員会・ 寮務委員会
	② ・基準2のp.27～28において、「一般科目及び専門科目を担当する教員間の連携が、機能的に行われているか。」という項目について、「連携を恒常的に行う組織は存在しない」と記載している。このことは、専門教育について十分に検討された教育カリキュラムが設けられている半面、専門技術者としてではなく社会人あるいは経営的センスをもつ技術者としての養成が不十分なものとなっているように思われる。すなわち、一般科目の位置付けを十分に検討し、専門教育に対する役割を明確にすることが必要ではないか。（門委員長）	本校の教育課程を審議する委員会として、本科では教務委員会、専攻科では専攻科委員会がある。これらの委員会は一般科目教員、専門科目教員から構成されており、一般科目および専門科目を担当する教員間の連携は、定常的に機能的に行われている。また、一般科目と専門科目の位置づけについても、科目系統図や本校の学習教育目標と科目との関係をシラバス等に示している。したがって、一般科目の位置づけおよび専門科目に対する役割は、明確になっている。		教務委員会・ 専攻科委員会
	③ ・今後の成長分野として環境、エネルギー、バイオが期待されており、学校に求められる人材もこれらに対応できる人材と考えるが、そのためにも、学科の見直しは検討しないのか。（時田委員）	環境、エネルギー、バイオの分野でも対応できる人材を育成するために、本科および専攻科の専門教科の中で、これら分野を取り上げて教育を行っている。さらに、本科4年から専攻科2年までを対象とした本校のJABEE教育プログラムは「環境創造工学」であり、地球環境および生態系に極力影響を与えない、環境に配慮したもののづくりのできる技術者教育を行っている。		教務委員会・ 専攻科委員会
基準3				
教員及び教育 支援者等	① ・基準3のp.48において、教育活動に関する定期的な評価について、「文部科学省主催の教員顕彰においては、『教員自己評価』、『教員による相互評価』及び『学生による授業評価』の結果による総合評価を行い、・・・」とあり、またp.55には「教員の採用・昇任に当たって、関係規則が整備されており、・・・」と記載されているが、資料が示されていないので判断ができない。（門委員長）	教育活動に関する評価については、別添資料①「平成21年度国立高等専門学校教員顕彰実施要項」により総合評価を行っており、該当者を機構へ推薦している。教員の評価・採用・昇任にあたっては、別添資料②「鹿児島工業高等専門学校教員選考規則」に示されるとおり関係規則が整備されている。		総務課
	② ・p.55には「教員団の年齢構成は平均年齢が適切であり、・・・」と記載されているが、資料がなく適切であるという根拠が不明である。（門委員長）	教員の年齢構成については、別添資料③「教員分布表」に示すとおりバランス良く構成されている。		総務課

	外部評価委員からの提言及び評価指摘事項	提言及び指摘事項に対する回答及び今後の対応（平成23年5月時点）	提言及び指摘事項に対する回答及び今後の対応（平成25年5月時点）	担当委員会
基準4				
学生の受入	① ・鹿児島県の中学校卒業予定者数が、平成23年3月は対前年に比べて約1300人余の減である。これから8年後の平成31年3月には、15419人で今年の3月より更に、約1700人の減の見込である。待っていれば志願してくれる時代はそう長くは続かないものとする。公立高等学校が定員割れを起こしている現状を参考に何かしらの対策が必要になるのではないかと考える。（高田委員）	（教務委員会回答）：本校の受験志願者数は一昨年、昨年と減少してきた。その原因の一つとして本校のPR不足があると考え、その対策の一つとして、平成22年度に霧島市地区と鹿児島市地区を対象に中学生と保護者向けの学校説明会を行ったところ、中学3年生人口が減少しているにもかかわらず一昨年度を上回った。このことから、これまで以上に、本校のPRに努め受験志願者増に努めていきたい。 （広報委員会回答）：中学校卒業予定者数が大きく減少していく中で、本校受験者を維持あるいは増加に繋げていくには、中学生及び保護者へ本校を強くPRしていかねばならない。これまで、入学者募集のポスターやパンフレット等の広報資料を作製してきたが、これらを総合的に見直し、入試情報や卒業後の進路等も盛り込んだ受験生が興味を引くようなパンフレット（学校案内）を平成22年度から作製している。また、「中学生のみなさんへ」等の広報誌も全面的に見直した。 また、本校をより良く理解してもらうためのイベントとして、平成20年度より「高専ロボットと音楽会」、平成21年度より鹿児島市立科学館との共催で「鹿児島高専の日」、平成22年度より「中学生と保護者のための学校説明会」を実施し、多くの中学生や保護者の参加があり、平成23年度入試の受験者増に繋げることが出来た。 さらに、本校の情報窓口となるホームページについては、平成21年度に、外部業者に委託し、英語版を含め全面的なリニューアルを行い充実させた。トップページなども見やすく、入試、イベント及び学生生活等の情報も発信している。トップページ等を改善し、さらに利用しやすいように充実させていく予定である。		教務委員会・ 広報委員会
	② ・受け入れ人材については、「ものづくりが好きな人」と明記してあるが、入試の点数配分は数学のみが200点でその他は100点となっている。工業系の学校であることを考慮すると理科も200点にできないのか。（時田委員）	他高専でも理科について傾斜配分をしているところもあり、今後検討をしていきたい。		教務委員会
基準5				
教育内容及び方法	① ・基準5のp.150において、『学生の成績評価に対する申し立てがあれば、その科目の担当者が対応している。』という説明があるが、手続きに関する取り決めが公開されているのか、実績はどの程度なのか不明である。（門委員長）	各学期の期末試験が終わった時点で、試験があった科目について学生へ答案返却と試験の解説を行っているため、学生は成績に対する確認ができるようになっていく。		教務委員会
	② ・p.177において、『…、ゼミ形式やプレゼンテーションを課題とする等、通常のものとは異なる教育方法を取り入れている科目も多い』として資料5-6-①-2（p.178～180）が示されているが、応用電子計測のシラバスでは、「ゼミ形式やプレゼンテーション」を課題としているようには見えない。2科目だけということなのか。（門委員長）	専攻科では、受講する学生数が、1科目あたり数名から20数名の少人数になることから、多くの科目でゼミ形式での授業やプレゼンテーションを課題としたり、演習を行ったりなど効果的な教育方法を取り入れている。このような講義方法が、シラバスの中で説明不足のものがあることから、今後、シラバスに講義方法が具体的に明示されるように改善したい。		専攻科委員会
	③ ・教育課程表を見ると一般科目も充実している。専門科目についてはシラバスも懇切丁寧に示され学生が学びやすくなっている。現実の問題として、単位未修得者や不登校の学生への対応もあるのではないかと。それらの学生への支援について協議する場や学生や保護者の相談はどのようになされているのか。転学や進路変更の道を斡旋する方策を検討したい。（高田委員）	単位未修得の科目については翌年度に再試験を行い、単位修得の機会が与えられている。また、不登校学生など問題を抱える学生については、学生何でも相談室や教務委員会などで担任を交えて協議し、教育支援を行っている。また、保護者懇談会や保護者向けの授業参観などが年2回開催され、そこで保護者は担任との面談などで進路などの相談ができるなど、学生の支援体制は整っている。		教務委員会
	④ ・企業から就職してすぐ辞めたり我慢ができないなど苦情がきているが、インターンシップについて製造現場の技術訓練と併せて企業経営者の話として、ものづくりの楽しさ、生き甲斐、働くことについての講話の時間をセッティングして生徒の意識や考え方の指導も必要では。（時田委員）	インターンシップを本科および専攻科において充実させ、将来の職業人としての教育訓練を行ってきたい。また、昨年から特別教育活動の時間等を利用して、技術士や本校教員OBの方にキャリア教育に関する講演をしていただき、学生の意識や考え方の指導も行っている。		教務委員会・ 専攻科委員会
	⑤ ・県内企業からは高専の卒業生を採用したくてもなかなか困難であるとの声を聞く。県内にも特色ある中小企業もあるので、地域貢献や地元企業の振興という観点からもインターンシップ先として県内企業も積極的に活用していただきたい。（時田委員）	県内の企業への就職実績が少ない原因の一つとして、学生が県内企業に対する知識が不足していることが上げられる。県内企業へのインターンシップを推進し、本校卒業生が地域企業に貢献できるように努めたい。		教務委員会・ 専攻科委員会
	⑥ ・ストレート卒業率が80%前後となっているが、留年者を減らすためにも、生徒一人一人の授業の習熟度を高める具体的な工夫や対策を早急にとるべきである。（時田委員）	平成22年度から数学と英語で基礎学力の定着やクラスに少数の女子学生への配慮などを考慮した科目別クラス編成を実施した。また、寮において高学年生が低学年性に勉強で分からないところを教えるチューター制をとっている。このように留年者を減らす対策をとっているが、今後もストレート卒業率を高める努力をしていきたい。		教務委員会
基準6				
教育の成果	① ・基準6のp.197において、『卒業した学生の学習・教育目標達成度については、教育プログラム点検会議で、サブ目標に割り当てられた科目の単位取得率（合格者数/受講者数）から検討している。』と記載されているが、これは準学士課程の卒業生個人の達成度ではなく、各科目担当者の教育達成度のようなもので、担当者の判断でどのようにでも設定できると思われる。学生個人がサブ目標をどの程度達成しているかを判定することが必要ではないか。（門委員長）	専攻科では、学生個人がサブ目標をどの程度達成できているかを判定するために、EXCELファイルで確認できるようにしており、これを基に、学習計画が立てられるようにしている。本科においても、今年度から学生個人がサブ目標をどの程度達成できているかアンケート調査を行う予定である。また、本科でも学年末に学習・教育目標をどの程度達成したかの自己評価を行なわせており、学年が進むにつれて、達成度の割合を確認できるので、学生は足りない部分を重点的に学習できる。		教務委員会・ 専攻科委員会

	外部評価委員からの提言及び評価指摘事項	提言及び指摘事項に対する回答及び今後の対応（平成23年5月時点）	提言及び指摘事項に対する回答及び今後の対応（平成25年5月時点）	担当委員会
基準6 教育の成果	② ・p.231の改善を要する点において、『サブ目標未達成でも卒業できる現状では卒業生の知識・技術レベルの保証が困難であることに対する対策が必要である』と記述されているが、サブ目標の達成目標がどのように設定されているのか、また教育課程によりほぼ自動的にこの目標が達成できるようになっていないということであれば、教育課程を改善する必要があるのではないかと。（門委員長）	一般科目や各学科の専門科目の教育課程の設定は、カリキュラムの構成を示す科目系統図に基づき設定されているが、高専機構から示されるコアカリキュラムと整合性をとりながら、改善を図る予定である。		教務委員会
	③ ・卒業生による達成度評価を調査されるなど、きめ細かな自己評価が実施されている。 これらの評価を踏まえた改善を要する点を明記してあるので、その改善を図りたい。教育の成果を評価することは、何時の時点でやるべきか、何を以って成果とすべきか、など意見の分かれるところであるが、卒業時点で出来る評価をすることは価値あることと捉える。（高田委員）	基準6に明記した改善点については、今後しっかりと取り組んでいく予定である。また、教育の成果についても、しっかりと評価できるように今後も取り組んでいく。		教務委員会・専攻科委員会
	④ ・ものづくり資金として国や県の競争的な公的資金の獲得に企業、大学、公的研究機関が力を入れているので、授業の中に資金獲得に繋がるような全体プラン作成やプレゼンテーション能力を育て、体験できる授業を導入できないのか。（時田委員）	資金獲得に繋がるような全体プラン作成やプレゼンテーション能力を育て、体験できる授業として、本年度から知的財産概論に関する教科を本科5年次に取り入れている。		教務委員会・専攻科委員会
	⑤ ・改善を要する点として4項目記載されているが、今後、具体的にどのような改善をするのか可能な限り記載して欲しい。（時田委員） ・ストレート在籍率において、特に本科3年次から4年次の時点での進級率が低いことに対する改善が必要である点。 ・サブ目標未達成でも卒業できる現状では卒業生の知識・技術レベルの保証が困難であることに対する対策が必要である点。 ・学生が行う学習達成度評価等の取組が継続的になされていない点。 ・本科（準学士課程）の卒業生自身および企業側（進路先）の双方から、より高度な専門知識・能力、語学力、コミュニケーション能力、問題解決能力等の必要性を指摘されていることに対応する必要がある点。	・平成22年度から数学と英語で基礎学力の定着やクラスに少数の女子学生への配慮などを考慮した科目別クラス編成を実施した。また、寮において高学年生が低学年性に勉学で分からないところを教えるチューター制をとっている。このように留年生を減らす対策をとっているが、今後もストレート卒業率を高める努力をしていきたい。 ・本科では、昨年度より、学年末に学習・教育目標をどの程度達成したかの自己評価を行なっており、学年が進むにつれて、達成度の度合いを確認できるので、学生は足りない部分を重点的に学習できる。また、専攻科では、学生個人がサブ目標をどの程度達成できているかを判定するために、EXCELファイルで確認できるようにしており、これを基に、学習計画が立てられるようにしている。 ・問題解決型能力の育成、開発型技術者の育成という観点から、各専門学科とも創造教室や創造設計などという与えられたテーマに基づき、個人で考えグループで討議する科目が設定され、お互いのコミュニケーションを通じたものづくり教育を行なっている。		教務委員会
基準9 教育の質の向上及び改善のためのシステム	① ・授業評価については今のシステムに加えて近隣の高専の先生方と相互に評価しあう形態は取れないか。同じ立場でより身近な具体的な意見が入手できるのでは。（時田委員）	今年9月に大阪府立高専の先生方の協力によりティーチング・ポートフォリオ（TP）のワークショップを開催する。府立高専の先生方にはメンターと称する立場でTP作成に関する助言・指導をいただくので、これまでの教育活動を見直すきっかけになることを期待している。		F D委員会
追加評価事項A 研究活動の状況	① ・地域企業のニーズを取り込んだ産学官連携を推進するためにも、高専が持っている技術シーズを積極的に公開する努力が欲しい。（時田委員）	本校教員が有する技術を研究者総覧システムにより公開し、地域の企業と共同研究を推進している。		地域共同テクノセンター
	② ・地域と密接に連携をとり、姿勢そのものは大変良いと感じますが、やや形式的で実際の成果に結びついているのか疑問のところもあります。（例.C A T I A教育）（宮村委員）	地域の若手技術者などを対象とした「人材育成事業」を平成18年度より経済産業省等に毎年申請・採択され実施している。 この人材育成事業は、地域企業のニーズの高い技術（3DCAD、NC加工、PLC制御、マイコン制御、燃料電池技術等）を実施しており、これまでに受講生の延べ人数が150名以上、企業の延べ数が10社となっている。今後、ニーズの高いと思われる先端的な技術（3DCADのCATIA、燃料電池など）について地域の実情を踏まえた講義・実習としていきたい。		地域共同テクノセンター
	③ ・地元中小企業の相談窓口の活性化も必要ではないかと思えます。本当に企業が困っていることは何？高専としてできることは？成果を外に見出すべきではないかと思えます。（宮村委員）	地元企業との密接な関係を築き、本当に企業が困っていることは何か、これまで、いくつかの課題が共同研究に結びついている。しかし、まだ、件数が少ないので、活性化を目指す。		地域共同テクノセンター
	④ ・「相談に乗るからきてください。」ではなく、自ら出向いて「御用聞き、的な姿勢も必要ではないかと思えます。（宮村委員）	地域共同テクノセンタースタッフが、分担して企業訪問を実施し、企業と密な関係の構築に努めている。これらも、さらに企業のニーズを明確にして共同研究への発展を目指す。		地域共同テクノセンター
	⑤ ・何よりも経営的視線が必要だと思えます。（ベンチャーなど）（宮村委員）	KTC例会で、指導的企業人に講演して頂き、本校教員も、経営的視野の習得に努めている。		地域共同テクノセンター
	⑥ ・産業構造が変革されている現在、産業戦略と結びついた先回りの研究が必要ではないかと思えます。（例.鹿児島県の産業構造の将来ビジョンと結びついた）（宮村委員）	本県の産業構造ビジョンは、自動車・電子・食品関連の戦略的産業振興分野及び地域資源活用分野に係る中小企業の新事業創出であり、本校でも取組を支援するために地域企業の人材育成に貢献している。		地域共同テクノセンター
追加評価事項B 正規課程の学生以外に対する教育サービスの状況	① ・公開講座や出前講座については、新技術やニュービジネスに繋がるもの、地域企業に密着したものが求められるが、鹿児島市での開催などのほか実施回数や内容が不明であり改善して欲しい。（時田委員）	地域の若手技術者などを対象とした「人材育成事業」を平成18年度より経済産業省等に毎年申請・採択され実施している。 この人材育成事業は、地域企業のニーズの高い技術（3DCAD、NC加工、PLC制御、マイコン制御、燃料電池技術等）を実施した。これらの人材育成事業は、鹿児島TLOが主となり、県内の企業に案内し、ほとんどのコースは本校で実施している。これらのほとんどの設備は、移動は難しいので本校でしか実施は難しい。ただし、マイコン制御コースにおいては鹿児島市にあるソフトプラザがごしまで実施した実績があり、さらに今後も鹿児島市で開催する予定である。実施会場、実施回数ならびに内容等は、人材育成事業案内チラシに掲載しているが、今後、明確に分かるように努めていきたい。		学生課・地域共同テクノセンター

	外部評価委員からの提言及び評価指摘事項	提言及び指摘事項に対する回答及び今後の対応（平成23年5月時点）	提言及び指摘事項に対する回答及び今後の対応（平成25年5月時点）	担当委員会
その他				
①	・今後とも、霧島市教育委員会との連携の継続と小・中学生を含めた体験活動への御協力と御支援、さらには、地域行事への参加やボランティアなど学生の積極的な参加をお願いします。（高田委員）	本校は霧島市と連携協定をむすび、小・中学生などへ公開講座や霧島チャレンジャーなどにおいて、ものづくり講座を実施しており好評を博している。また、学生会が中心となって、本校から単人駅までの道のごみ拾いや駅の清掃などを行って地域に貢献している。今後ともこのような取り組みを継続的に行っていきたい。		教務委員会・学生委員会
②	・自己点検・評価報告書などを概観して数値化された目標が少なく、外部評価がしにくい。文章化されたものが大半であり、可能な項目については数値目標をより積極的に設定し、ローリングしながら、目標達成へ向けて努める姿勢があつていいのではないかと。（濱田委員）	『可能な項目については数値目標をより積極的に設定』は、PDCAサイクルを実施するにおいてもわかりやすい指標であり、できるだけ数値化できるよう努めたい。		自己点検・評価委員会
③	・全体を通して優れていると評価できると思うが、「自己点検・評価報告書」の数値的な結果がどうだったのか分からなかった。ちなみに、学生・保護者・地域住民等への評価アンケートの結果等も同様に気になった。（石窪委員）	『学生・保護者・地域住民等への評価アンケートの結果等』に関して、できるだけ数値的な結果を盛り込むよう努めたい。（その他②の提言）		自己点検・評価委員会
④	・産業界からの新入社員を受け入れる立場で申し上げますと、基礎学力の低下、偏差値教育、〇×教育、ゆとり教育など弊害ももの考えないエンジニア問題に苦慮しております。（宮村委員）	各学科とも、創造設計や創造教室などといった創造性を育む目的でのものづくり教育に取り組んでいる。これらの科目では、極力自分やグループで考えるように教育内容を工夫している。また、専攻科では、専門分野の知識と結び付けて、問題を解決する能力を身につけさせるために、環境創造プロジェクト（PBL科目）の科目を必修化している。さらに、学生の卒業時に身につけておくべき資質能力を保証できるように、教育内容、方法等を今後とも改善して、対応したい。		教務委員会・専攻科委員会
⑤	・就職率が高いというのは、ここ数年の社会情勢の中では特筆すべき美点であると考えられる。たしかに、受験生にとって（あるいはその保護者にとって）県外のいわゆる「優良企業」に入れる高専は「いい学校」であり、進学先として人気が高いのは喜ぶべきことかもしれない。しかし、県外の大手ではなく、鹿児島に残って地元の発展に寄与する技術者が巣立つことも期待したい。鹿児島でベンチャー企業を興したり、入社後、その企業を力強く牽引したり、といった卒業生を相次いで輩出するような姿も、県外就職組のほかにもっとあつていいのではないかと。（濱田委員）	本校卒業生のうち、鹿児島県内の企業に就職する学生の割合は少ない。学生が鹿児島県の企業を知らないことや待遇面での問題等が原因しているものと思われる。インターンシップや工場見学等を通じて、鹿児島の企業をPRして、地元企業で活躍できる学生の割合も増やせるよう努めたい。		教務委員会・専攻科委員会
⑥	・社会が今後必要の人材として求めるタイプは自ら問題を発見することができ、解決へ向けて最善の努力を継続できる集団ではないだろうか。加えて、状況の急激な変化にさらされようとも揺るがないマネジメント能力も求められよう。単に補佐的な技術者に終わらず、目標に立ち向かう集団・組織を大局から概観する力についてもいい。委員会当日、地域の公園整備を学生たちが行ったという説明があつたが、地元との交流促進という面からは評価することができよう。しかし、経緯を詳しく聞く時間はなかったものの、この課題は学生自らが見つけ、班などに分かれて討議する中で、設計などを行ったのだろうか。もちろん自主性を尊重し、最大限引き出すためのカリキュラムは現在でも組まれている。 専攻科の学生が新聞紙を使って体重60kgの人が座れるいすを作った授業などは、その好例と考えられる。学科生のところ話したことのない学生と同じ班になって討議を重ね、方向性を絞り込み、課題解決に知恵を絞った。授業時間以外の作業もいとわなかったのは、もの作りの原点をどの学生も思い出したからではないか。「これだけ自分たちで考えさせられた授業はなかった」「とても楽しかった。これまでで一番かもしれない」という学生の感想も聞いた。 こうした授業が学科生のところから発展学習といった形で、幅広く組めないものだろうか。学年が上がるにつれて、問題を見つけることから始めさせることも取り組みやすくなる。素人考えだが、課題に取り上げられそうな素材は、学外に踏み出せば、そこそこ転がっているのではないかと。実際にある橋や建物などの建造物の強度を高める手段を、ある条件をつけて考えさせる。道路の交通量が急激に増加したとして、その際に考えられる一帯のデザインコンペだつてできるかもしれない。見方を変えれば課題になりそうなヒントを学生に気づかせるには、教官が地域をどれだけ知っているか、交流しているか、足を運んでいるか、といった点も鍵を握るの言うまでもない。（濱田委員）	地域の公園整備を学生たちが行った件に関しては、学校近辺特に学生寮近くの空き地を憩いの場の公園にできないかという課題について学生が調査した後、班に分かれて公園のモデルを製作からコンペまで行った。その後優秀なモデルについて地域住民と意見交換を経て当時の単人町に提案し実現したものである。これ以外にも、各学科で問題解決型能力の育成、開発型技術者の育成という観点から、本科では創造教室や創造設計などの科目において、与えられたテーマに対して、個人で考えたりグループで討議して解決する教育を実施し、お互いのコミュニケーションを通したもののづくり教育を行なっている。 このように本科でのものづくりを通して自ら問題解決に当たる授業を行っており、その発展学習という形で専攻科における環境創造プロジェクト（PBL科目）へ連携している。 専攻科では、環境創造プロジェクト（PBL科目）の科目において、専門分野の知識と結び付けて、問題を解決する能力を身につけさせる教育を行っている。さらに、本科の卒業研究、専攻科の特別研究などの内容も充実させて、開発型技術者の育成にあたっていきたい。また、教える側の教員の資質向上に努めたい。 その具体的な方策の一つとして、提言にあるように地域に課題として残る問題の発見は、公園の提案をして実現した例を見ても、本校が地域住民と交流し意見を聞くことで、小さな課題でも見つかる事を考えると、教員側ももっと地域に目を向ける必要があり、そうすることで本校と地域が連携してともに地域全体を発展させることができるのではないかと考える。		教務委員会・専攻科委員会
⑦	・高専ならびに鹿高専の将来構想・ビジョンがよく見えなかった。（石窪委員）	鹿児島高専の特色をより明確にすることで、戦略性を出し、それに沿った運営に努めていく。		自己点検・評価委員会
⑧	・鹿児島の特色を生かした研究、今日的課題解決型の視点をもった取り組みは、今後もますます拡げていただきたい。環境・エネルギー、防災、農業など鹿児島のフィールドから全国・世界に発信できる素材が多々あると思うので、他組織との連携もより進めていける体制づくりが必要かと思う。テーマによっては、学科間連携や県内はもちろんのこと、県外ならびにアジア等海外との連携も視野に。（石窪委員）	鹿児島の特殊土しらすや桜島火山礫などの有効利用などの研究はあるが、世界に発信できる研究に至っていない。また、鹿児島湾奥部にレアメタル鉱の発見が岡山大学により行われているなど、鹿児島には、種々の素材の可能性があると考えられる。本校でも、多様な方面から鹿児島県内外との連携を図り、世界に鹿児島を発信できるように努める必要がある。		地域共同テクノセンター

	外部評価委員会からの提言及び評価指摘事項	提言及び指摘事項に対する回答及び今後の対応（平成23年5月時点）	提言及び指摘事項に対する回答及び今後の対応（平成25年5月時点）	担当委員会
その他	⑨ ・一般教養科目の充実、前回申し上げましたが、その後改善されているのか。どのような点が変化したのか、上記のような、倫理観を持った技術者を育成する観点からも取り上げるべき科目があるのではないか。（石窪委員）	一般科目の充実について、前回から外国語選択科目（韓国語、中国語）を追加し、また、技術者の倫理観を育成するために本科（5年）で技術倫理総論を、また、専攻科では技術倫理の科目を設けている。さらに、鹿児島県内大学と連携した大学地域コンソーシアムが立ち上がり、単位互換性に基づいて各大学が開講しているコーディネイト科目に多くの一般教養科目が充実しているため、多くの4,5年生が受講しているため、前回に比較して多くの一般科目を受講する機会が与えられている。		教務委員会・専攻科委員会
	⑩ ・女性教員の増員については、赤坂校長先生のインタビュー記事の中でも取り上げられていたが、ぜひその方向で進めていただきたい。具体的な目標や計画があるのでしょうか。（石窪委員）	女性教員の比率向上を図るため、平成22年度は都市環境デザイン工学科助教の公募において、「女性のみ」を対象として実施し、平成23年4月1日付で女性教員1名を採用した。 現在、平成21年度に3名に対して本校の女性教員は5名となった。		総務課
	⑪ ・鹿児島高専の、国立高専の中でのポジションというか、他の高専との比較において、貴校の取り組み、学力、研究面等様々な面でどうなのか、客観的評価、課題を抽出する上で、気になった点の一つである。（石窪委員）	鹿児島高専がより力を入れるべき取り組みを判断する材料として、九州地区あるいは全国高専の中での教育・研究・地域連携等で、鹿児島高専のポジションを把握することは必要である。教育面では入学志願者倍率、学習到達度試験成績、インターンシップ参加人数などがある。研究面では科学研究費採択率、共同研究件数など。また地域連携では公開講座件数、地域人材育成事業件数などに関する九州地区・全国高専の客観的データがあるので、鹿児島高専がより力を入れるべき教育・研究・地域連携等の活動事項の選択を行う際など、それらも参考にしつつ、判断している。		自己点検・評価委員会
	⑫ ・貴校は、様々な面で良く取り組まれていると思ったが、残念ながら、まだまだ貴校について知らない方が少なくない。広報や情報発信のさらなる充実も望むところである。（石窪委員）	本校をより良く理解してもらうため、報道機関への情報提供、各種イベントや公開講座等の開催等により情報発信を行っている。地元新聞社の南日本新聞社については、本校地区を管轄している霧島総局及び鹿児島市の本社に対し取材の依頼を行い、高専ロボコン等の記事掲載を頂いているところである。平成22年度については、すでに直接訪問を行ったが、情報提供を頻繁に行い、さらに多くの記事掲載により情報発信を充実させる。 また、県庁及び霧島市役所の記者クラブへの案内文（取材依頼）の送付、いわゆる「投げ込み」を更に頻繁に行い充実させる。その他の報道機関（NHKのデータ放送等）についても、本校の各担当係や教職員から直接取材依頼を行う。 基準4の学生の受け入れでも述べたように、本校をより良く理解してもらうためのイベントとして、平成20年度より「高専ロボットと音楽会」、平成21年度より鹿児島市立科学館との共催で「鹿児島高専の日」、平成22年度より「中学生と保護者のための学校説明会」を実施した。これらにより、多くの中学生や保護者の参加があり平成23年度入試の受験者増に繋げることが出来たので、更に充実させ継続していく予定である。さらに、本校のホームページについては、平成21年度に、外部業者に委託し、英語版を含め全面的にリニューアルを行い充実させた。入試、学内外のイベントあるいは学生生活等の情報がより多く分かり易く興味を持てるようなものになるように、トップページ等の改善を行いさらに充実させていく。		広報委員会
総括	・スペシャリストとしての技術者養成に熱心に取り組まれており、これは大きく評価できるが、一方で貴校の大きな特色である「卒業生による起業率が高い」という独自性を維持、発展させるためにも、マネジメントの素養がある技術者を養成する必要があるのではないか。大手企業でも管理職になれる素養を付け加えることができれば、鹿児島工業高等専門学校は全国でも優れた教育機関として評価されるものと思われる。評価委員の会議において、「戦術はあるが戦略がない」という意見がでた。この言葉を熟慮のうえ、さらに優れた工業高等専門学校に発展してほしいとの評価委員全員の要望を記述して、総括を終える。（門委員長）	『マネジメントの素養がある技術者を養成』のために一般教養科目の充実、PBL科目の充実などで努力していく。 『戦術はあるが戦略がない』のため鹿児島高専の特色をより明確にすることで、戦略性を出し、それに沿った運営に努めていく。（その他⑦の提言）		自己点検・評価委員会

基準1の自己評価の概要

本校では、創設時から現在にいたるまで、学則第1条に本校の設置目的及び使命を掲げている。この目的を基に、本校の教育理念が定められ、この教育理念を達成するための3つの目標及び学習・教育目標が設定されている。また、本校では、養成すべき人材像を4つの学習・教育目標として定め、学生が卒業(修了)時に身につけるべき具体的資質・学力については、サブ目標で定めている。

学則第1条及び第46条に定められた本校の目的は、学校教育法第115条及び第119条に沿って策定されたものであり、この目的を踏まえて本校の教育理念、教育理念を達成するための3つの目標、本校の教育の目的である4つの学習・教育目標が定められていることから、本校の目的は、そのいずれにおいても、学校教育法の規定から外れるものではない。

本校では、学生便覧、シラバス、ウェブページ等を用いて、学生及び教職員に本校の目的の周知を図っている。学生に対しては、入学式、始業式などで「学習・教育目標」についての説明が行われ、教職員については、校務連絡協議会及び新任教員研修会等において、本校の目的が説明されている。

また、本校の目的はウェブページや学校要覧等を用いて社会に広く公表されている。特に、中学生対象の一日体験入学や学校紹介及び中学校個別訪問等を通じて、入学者募集要項や「中学生のみなさんへ」を配布し、本校の教育の目的である学習・教育目標を中心に説明を行っている。さらに、本校の概要や活動状況を地域社会に知ってもらうために、鹿児島市立科学館との共催事業を通して本校の教育研究内容を知ってもらい、またこの共催事業が新聞記事で取り上げられた点は、本校の目的を広く社会に公表する手段として高く評価できる。

基準2の自己評価の概要

準学士課程の学科の構成は機械工学科、電気電子工学科、電子制御工学科、情報工学科及び土木工学科の5学科であり、高等専門学校設置基準を満たしている。また、一般教育科を含めた各学科は、本校の教育理念に沿った教育方針のもと、理論のみではなく、実験・実習を多く取込んだ教育を行っている。このことから、学科の構成は教育の目的を達成する上で適切なものとなっている。専攻科課程は、準学士課程の学科を基盤とした機械・電子システム工学専攻、電気情報システム工学専攻、土木工学専攻の3専攻からなり、この内容ならびに学則に定められた目的は学校教育法の規定に適合している。また、各専攻の教育方針は、本校の学習・教育目標に沿ったものである。このことから、専攻科の構成は教育の目的を達成する上で適切なものとなっている。

全学的なセンターとして、情報教育システムセンターと地域共同テクノセンターが設置されている。情報教育システムセンターは、主に情報処理教育に利用されている。また、地域共同テクノセンターは、産学連携のための利用のほか、ものづくり教育や卒業研究の場としても利用されている。以上のことから、本校に設置された全学的なセンターは、いずれも、「創造力豊かな開発型技術者」の育成に利用され、本校の教育の目的を達成する上で適切なものとなっている。

教育課程全体を企画調整し有効に展開するための検討を行う委員会として、準学士課程には教務

委員会が、専攻科課程には専攻科委員会が設置されている。両委員会とも、それぞれの課程における各学科・専攻の意見を集約・調整できるような人的規模・バランスの取れた委員構成になっている。また、両委員会は、月2回委員会を開催し、本校の教育活動に関する事項について審議し、企画・立案を行っている。なお、両委員会において審議された事項は、校務連絡協議会において協議され、校長の決定を経て実施に移される。以上のことから、教育課程全体を企画調整し有効に展開するための検討を行う委員会が適切に整備され、活動を行っている。

教育課程の編成や授業内容及び進捗等に関しては、教務委員会及び専攻科委員会を中心に、一般科目教員と専門科目教員が連携をとっている。

学級担任の行う教育活動を支援するために、副担任制やチューター制を採用している。また、成績会議や「学生何でも相談室」により、学生の学習・生活指導に関する担任及び専攻長業務を支援している。そして、専攻科委員会も、これらと同様に専攻長業務を支援している。さらに、学生課教務係が学級担任および専攻長、また、学生係が課外活動指導教員の教育活動に対して、事務的支援に当たっている。なお、本校学生の保護者で組織する後援会は、特に、課外活動の指導等に対して財政的支援を行っている。

以上のことから、本校では教育活動を円滑に支援するための支援体制が機能している。

基準3の自己評価の概要

本校は、1学年5学級（1学科1学級）、入学定員200人で、一般科目担当教員として、専任教員23人、非常勤講師21人を配置している。また、専門科目担当教員として、専任教員53人、非常勤講師34人を配置しており、本校の学習・教育目標を達成するために、必要な教員を配置している。専攻科では、教育業績と研究業績等とを評価確認した上で、本校学習・教育目標を達成するために、必要な授業科目を担当する教員を適切に配置している。

教員団の年齢構成は平均年齢が46歳であり、各学科の教員の平均年齢も大差なく年齢構成は適切であり、採用前の企業経験等の経歴による構成が約半数となっており、バランスの取れたものとなっている。また、学生に対してより高度な教育を行うため、学位未取得者に対しては、研修制度を利用して学位を取得しやすい環境を整えている。さらに、教育、学校運営、社会貢献に関して特に顕著な功績をあげた者を表彰する制度を設け、教員組織の活動の活性化を図っている。

教員の採用については、教員選考規則に基づき候補者の公募を行った上で、鹿児島工業高等専門学校教員推薦委員会及び鹿児島工業高等専門学校教員審査委員会で選考している。また、昇任についても教員選考規則に定められている研究業績、教育業績及び校務業績を考慮した昇任が実施されている。

教員の教育活動の評価については、文部科学省（平成16年度からは高専機構）主催の「教員顕彰」に基づいた評価を行っている。また、FD委員会が実施している「学生による授業評価アンケート」により、個々の教員の教育に関する評価を把握している。この他に、校長及びFD委員会を中心に教員の授業視察を行っている。校長は、これらの評価を基に教員の教育能力を評価している。

事務職員については、各係に適切な人材・人数を配置し、教育支援については、主に学生課にて最適な運営が行われている。また、技術職員は事務部長の下に技術室として組織化され、分野の異

なる各学科等に十分な教育支援ができるよう、必要な人材と人員が確保されている。

基準4の自己評価の概要

準学士課程入学者選抜と編入学生選抜に関するアドミッション・ポリシーは、本校の教育の目的である学習・教育目標に沿って明確に定められている。これらのアドミッション・ポリシーは、本校ウェブページや入学者募集要項に掲載され、進学説明会や一日体験入学を行うことにより将来の学生を含め社会に対して広く公表されている。また、教職員に対しては、入学試験説明会において説明を行い、周知を図っている。準学士課程の入学者選抜及び4年次への編入学選抜は、アドミッション・ポリシーに沿って、適切に実施されている。

専攻科課程については、アドミッション・ポリシーが平成17年度に明文化され、平成19年度以降専攻科入学者募集要項並びに本校ウェブページに記載され、広く社会に公開されている。また、教職員へは委員会報告により、入学予定者には募集要項により周知が行われている。入学者選抜の実施に当たっては「鹿児島工業高等専門学校専攻科入学者選抜要項」が定められ、アドミッション・ポリシーに沿って適性に行われている。アドミッション・ポリシーに沿った学生の受入が実際に行われているかどうかについては、課程修了時に学習・教育目標の達成度により検証しており、その結果により入学者選抜方法の改善が行われている。入学者の定員に対する実入学者数は、最近志願者の急増により、専攻によっては最大1.8倍程度となっているが、この程度であれば教員数及び施設設備の両面から教育・研究に支障がないことを確認の上、入学者選抜が行われている。

基準5の自己評価の概要

(a) 準学士課程

授業科目が各学習・教育目標に対応しており、その修得により、学生が学習・教育目標を達成できるようになっている。また、各科目間における連携も考慮され、専門科目を効率よく修得できるように科目が配置されている。各科目の授業内容及び水準も適切なものとなっており、講義、演習、実験・実習等の授業形態の割合も適切なものとなっている。さらに、各授業科目においては、種々の学習指導上の工夫がなされている。

学生のニーズへの対応として、鹿児島県内の大学及び九州地区の他高専との単位互換協定を結び、また、インターンシップを実施し、所定の単位を認定している。

シラバスには、各科目の具体的な達成目標、他の科目との関連、目標達成のための学習上の留意点、授業内容、成績評価基準が明確に記載され、本校の学習・教育目標との関連も明示されていることから、各科目の教育課程における位置づけ、理解すべき内容等がよく分かるように配慮されている。また、シラバスは、ウェブページでも公開されており、さらに担当教員が最初の授業で配布し説明を行っている。なお、半数以上の教員が、授業進度や試験範囲の確認などに活用している。

創造性を育む教育方法として、各学科においてPBLを取り入れた科目を配置している。また、各学科においてインターンシップを導入し、実社会での企業活動を体験し実学的な経験をさせることにより、創造力豊かな開発型技術者の育成を図っている。

成績評価、課程修了及び卒業については、学則並びに関連規則にその要件が明確に定められ、こ

れらは、学生便覧により学生に十分に周知されている。また、単位認定、進級又は卒業については、学年末に開催される進級判定会議及び卒業判定会議において適切に行われている。

人間の素養の涵養については、特別活動が、設置基準で定められている 90 単位時間以上実施されているほか、学校の指導の下に行う学生会活動としての課外活動や、学生が主体的に企画・参加する多様な学校行事も設けて実施している。

(b) 専攻科課程

教育課程は、学習・教育目標に沿って科目が編成され、また体系性も確保されており、準学士課程との連携に十分配慮したものとなっている。5年間の教育の上に位置する高度な教育課程となっており、専攻科課程まで含めた連続性が考慮されている。特に各目標について必修科目が設定されているなど科目配置は適切であり、達成基準として TOEIC をはじめとした各種英語検定、や学会発表の外部評価も取り入れるなど、教育内容の水準は十分なものになっている。

学生の多様なニーズ・社会からの要請に対応して、環境関連科目を全専攻共通科目とし、他専攻や他の教育機関の単位取得を可能にしている。さらに、英語科教員による教材の提供と節目での指導、学習方法のアドバイスを行っている。

また、平成 19 年度に、地元の鹿児島県技術士会と連携協力に関する協定を結び(資料 5-5-③-2)、専攻科 1 年専門共通科目の「環境創造工学特別講義」と専攻科 2 年一般科目の「技術倫理」において技術士の支援を受けて、環境対策、環境保護、エネルギー問題等の環境に関連した技術分野についての最新のトピックスや、技術者として不可欠な倫理観を教授している。

授業形態は単位認定上、講義、演習、実験・実習に分けられており、それぞれの単位数の割合は、開講単位数全体に対して、演習は 5～6%程度、実験実習は 20～24%程度であるが、講義形態の授業であっても少人数教育を生かして、ゼミ形式やプレゼンテーションを課題とするなどの教育指導上の工夫がなされている。また、実験・実習科目である特別研究の実施時間は、単位数上の時間を大幅に上回っており、演習、実験・実習に関する教育目標の達成が効果的に行われている。

創造性を育む教育方法の一環として、インターンシップが特別実習として単位化され、その受入を国内外の企業、研究所、大学等に依頼しているが、参加学生はまだ十分とは言えない状況である。しかし、平成 21 年度より専攻科委員会と地域共同テクノセンターが協力し、県内のインターンシップ先の開拓及び斡旋に力を入れており、今後はインターンシップ参加学生数の増加が期待される。また、本校では準学士課程の全学科に、専攻科課程の 1 年次、2 年次において、ものづくり実習を中心とした PBL が取り入れられている。このことから、インターンシップに関しては今後も改善の余地はあるが、準学士課程との一貫性を考慮した場合、創造性を育む教育は十分に工夫されているといえる。

シラバスには、当該科目の具体的な達成目標、他の科目との関連、目標達成のための学習上の留意点、授業内容、成績評価基準が明確に記載されているとともに、本校の学習・教育目標との関連も明示されており、その各科目の教育課程における位置づけ、理解すべき内容等がよりよく理解できるように配慮されている。また、シラバスは、ウェブページでも公開されているとともに、科目の担当教員が授業の最初に学生に配布して説明を行っている。

特別研究については、シラバスに研究テーマ・到達目標が明示されている。特に、特別研究の質の高さは、学外の学会において発表することで保証され、専攻科で修学するにふさわしい研究指導が複数の教員により行われている。

単位の認定及び課程修了の認定は規則に明記され、適切に行われている。

基準6の自己評価の概要

- ・ 本科（準学士課程）卒業時に身につけておくべき学力や資質・能力は、それぞれの学習・教育目標とサブ目標に割り振られた科目の単位取得状況から、その達成状況を把握・評価している。準学士課程では、過去3間の卒業生の各サブ目標に対応した科目の単位取得率が90%以上を達成しており、全クラスの科目評価平均点は70点を超えている。従って、本科（準学士課程）における教育の成果や効果は上がっていると判断できる。ただし、本科3年次から4年次への進級率がやや低いこと、サブ目標未達成者でも卒業可能であることに対しては、今後改善を図る必要がある。

- ・ 本科（準学士課程）卒業生は、本校で学んだ専門知識や技術を活用できる職業に就いている。また、進学先は、本校で学んだ専門知識をさらに発展させることができる大学・専攻科等である。卒業後の進路状況等の実績や成果から判断して、教育の成果や効果が上がっているものと考えられる。

- ・ 本科（準学士課程）学生の自己評価による学習・教育目標達成度評価は継続して実施されていない。しかしながら、「授業評価アンケート」等における関連する設問項目に対する回答からは学生自身の達成度評価は概ね高いという結果が得られており、このことは学習・教育目標に対応付けられた単位取得状況の高さからも裏付けられている。従って、本科（準学士課程）課程においては、本校の意図する教育の効果は上がっているものと判断される。

本科（準学士課程）学生が在学時に身につけた学力や資質・能力に関する意見を聴取するための取組として、卒業生や進路先などの関係者に対してアンケート調査を実施している。その結果によると、専門的な基礎知識資質・基本能力については評価が高く、教育の効果は上がっていると言える。その反面、より高度な専門知識・能力、語学力、コミュニケーション能力および問題解決能力等については、卒業生自身および企業側（進路先）の双方から不足しているとの指摘がある。このような指摘に対応するための教育方法の改善に取り組む必要がある。

専攻科課程では、平成19年度以降の修了生は、4つの学習・教育目標を全て達成している。特別研究では、修了生全員が関係学会で発表しており研究水準が確保されている。これらのことから、教育の成果や効果は上がっていると判断できる。修了生は、本校で学んだ専門知識や技術を活用できる職業に就いている。また、進学先は、本校で学んだ専門知識をさらに発展させることができる大学・大学院等である。このことから、卒業後の進路状況等の実績や成果から判断して、教育の成果や効果が上がっている。

学生の自己評価による学習目標達成度評価を実施した結果、専攻科課程の学生の達成度評価は、本校が意図したレベルに近いものである。専攻科課程では、本校の意図する教育の効果は上がっていると判断される。

本校学生が在学時に身につけた学力や資質・能力に関する意見を聴取するために、修了生や進路

先などの関係者に対してアンケート調査を実施している。その結果によると、専門的な資質・能力については概ね高いとの評価が得られ、ほとんどの企業が本校専攻科修了生の知識・能力および勤務成績に満足しており、本校の教育理念の一つである開発型技術者の育成の点においては、教育の効果が上がっていると判断される。一方、語学力を含むコミュニケーション能力については、不足しているとの意見も見られた。そこで、平成 21 年度から英語コミュニケーション力強化のための英語科教員によるアドバイザー制度を設置した。さらに、平成 22 年度の専攻科の推薦入試の英語の基準として、実用英語検定準 2 級以上、工業英語検定 3 級以上、または TOEIC スコアがあらかじめ決めた基準点以上であることを追加する予定である。

基準 7 の自己評価の概要

準学士課程及び専攻科課程の双方において、入学時のガイダンス、シラバスを用いた授業のガイダンスなどを行う体制が整備され、適切に実施されている。また、学生の自主的学習を進める上では、学級担任や特別研究指導教員による相談・助言体制が整備され、機能している。さらに、オフィス・アワーズや学生何でも相談室においても、学生の相談を受け付ける体制が整備され、機能している。

自主的学習スペースとして、図書館・情報教育システムセンター、教室・ゼミナール室等が整備されている。コミュニケーションスペースも整備され、休み時間等に学生が利用している。

学生の学習支援に関するニーズは、授業評価アンケートにおいて把握している。また、各授業担当教員は、関連する資格試験等について、受験案内や手続き、受験勉強の支援等を行っている。資格試験等の合格者には所定の単位を認定しており、特に、英語に関しては、TOEIC BRIDGE、TOEIC IP テストを学内で実施している。外国留学に関しては、留学先で修得した単位を認定している。また、海外の大学との国際交流協定を結んでおり、学生の海外研修を支援している。編入生・留学生についても、数学、日本語等の学習支援を行っている。

各クラブ・同好会の活動、学生会活動を支援するために、指導教員を配置するとともに、必要な（運営・備品購入）資金・施設等を提供している。学生の生活・学習・経済面に係わる指導・相談・助言を行う体制として、学級担任制度、学生何でも相談室、保健室が整備され、学生委員会も学級担任と密接に連携をとりながら、学生指導にあたっている。なお、セクシュアル・ハラスメントについては、その防止等に関する規則が定められ、相談・助言等の体制が整備されている。

学生寮には、勉強や生活の場として必要な設備が整備されている。また、寮務委員会を中心に、宿日直教員や寮務係の職員が、学習・生活指導を行っている。さらに、学寮チュートリアル制度も設け、上級生が低学年の学習を支援している。寮生の自主的組織として寮生会が組織され、寮務委員会の指導の下で、寮生の行事や生活について企画・運営を行っている。

進路指導については、各学科のクラス担任や各専攻の専攻長が、個別面談をはじめとした適切な進路指導を行っている。また、進路情報（卒業生・修了生の進学就職先）の収集については、学生課にて収集され、閲覧ができるよう整えられており、企業訪問等も実施されている。

基準9の自己評価の概要

教育活動の実態を示すデータとして、基礎・基本、シラバス、試験答案、学業成績一覧、授業評価アンケート調査結果等を収集・蓄積する体制が整備され、適切に保管されている。また、これらのデータを用いて評価を実施する評価機関としてFD委員会、自己点検・評価委員会、外部評価委員会、成績会議が整備されている。

本校では、学生による授業評価アンケートにより学生の意見が収集されており、その評価・分析がなされ、自己点検・評価に適切な形で反映されている。また、学外からの意見を求めるため、外部評価委員会を設置している他、企業・進学先・卒業生に対してアンケートを実施し、本校の教育の状況に関する社会の意見・要望を収集し、その結果は自己点検・評価に適切に反映されている。

準学士課程及び専攻科課程では、成績会議、FD委員会を評価機関、教務委員会、専攻科委員会、教育プログラム点検会議を改善機関とした教育の質の向上・改善のためのシステムが整備され、教育課程の見直しなど具体的かつ継続的な方策が講じられている。

学生による授業評価アンケートや校長による授業視察の評価が実施され、その結果はFD委員会により集約され、各教員にフィードバックされる。各教員はこれらの結果や教員相互の授業参観で寄せられた意見などに基づき、各教員は授業改善計画書を作成し、FD委員会を通じて校長に提出している。これらは、定期的・継続的に実施されており、授業改善の状況は学校に把握されている。

教員の教育研究の成果が、教育内容・方法の改善に活かされている例や、教員の研究分野の知見を活かして教科書が執筆され、授業に活用されている例もある。さらに、卒業研究や特別研究においては、教員の専門分野の研究を活かした指導が行われている。

ファカルティ・ディベロプメントについては、FD委員会が中心となって教務委員会他と連携するなどして、学生による授業評価アンケート、校長による授業視察、教員相互の授業参観、FD講演会などを実施している。各教員は授業評価アンケートの結果や校長による授業視察の評価などに基づき授業改善計画書を提出し、次年度の教育改善に向けた取り組みを行っている。また、教員集会の実施により、教育上の課題に対する情報の共有や問題解決に向けての協力体制が整備されているなど、教育の質の向上や授業改善に寄与していると考えられる。

